樋水龍神縁起　第二部　冬、玄武

八少女夕

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2013 Yu Yaotome

目次

粗目雪
不思議な若者
『荒ぶりし氣』
告白
神問い
『和みし氣』
神社の暮らし
レクイエム
『水晶籠』
呼びかけ
Purgatorio
龍
奥出雲
慟哭
龍の池
母の心
聖ヴァレンタインの夜

粗目雪

京都の冬は底冷えがする。この年になるまで関東以外で暮らしたことはないが新堂朗は京都の冬をよく知っていた。一週間前に降った雪が、本殿の裏にはまだ残っていた。その雪は日中に弱々しい太陽の光を一時間ほど受けては溶け、それ以外の時間にはまた冷えかたまった。そうやって結晶が育った雪は粗目雪となり、陽の光を浴びるときらきらと輝いた。榊の葉は霜に覆われていた。全てが凍えてうずくまるような季節、朗は年末年始の喧噪が過ぎた穏やかな一月の朝を、心穏やかな懐かしい心地で眺めていた。

慌ただしい数ヶ月だった。

夏には新堂朗はまだスーツを着て、百貨店で働いていた。人事部は人手が足りなかったので、朝は始業時間より一時間は早く出勤し、ほぼ毎日残業をしていた。都心のオフィス勤務だったので、自然の移り変わりにはほとんど縁がなかった。なぜここで働いているのだろうかと、よく考えた。少なくともその仕事をしたいと考えたことは一度もなかった。たしかに新堂朗は人を見る目には長けていた。彼を人事部に引き抜いた本部の人間も、人を見る目に長けていたのであろう。同期の中ではその年に本部に引き抜かれたのは朗一人であったし、「エリートコースだよ」と先のこともよく示唆された。が、これが自分の生きる道なのかと言う疑問が脳裡を離れなかった。

入社当初はそれほど考えていなかった。仕事になじみ、精一杯こなすことが楽しかった。配属された宝飾品部では販売の成績も良かったし、社内には好みの美しい女性が多かったのでプライヴェートもそれなりに充実していた。若かったので、この人生をどう生きるべきかなどということもあまり氣にしなかった。

人事部に引き抜かれたのは、入社して五年目のことだった。すぐに主任となり三年で課長補佐になり、採用の担当として重要な役目をまかされるようになった。そのころから、仕事に対して疑問を持つようになった。新堂朗は能動的な男であった。彼にとって重要なのは自分の力で動き、努力し、そして獲得するということだった。誰かを右から左へと配属するような仕事には、本質的には興味が持てなかった。単に与えられた仕事をこなし、評価を得て、もっと上に進むためのステップだと考える他はなかった。

ところが、今から六年前の秋に、大きな転機があった。早良ゆりが、入社希望者として面接に現れたのである。

新堂朗の人生は、いつも二つに別れていた。前途あり何でも簡単にこなせる冷静で現実的な男の表の顔と、秘密裏に千年前の因縁を探し続ける隠れた顔である。かつて京の都にいたことを朗は記憶として持っていた。その時には新幹線もＪＲ京都駅もなかった。出雲へ行くのも馬が必要だった。奥出雲の樋水村の神域で、若き安達春昌は媛巫女瑠璃と出会った。それからその記憶は失われることがなかった。室町時代に農民として生まれた時にも、その後に下級武士として生まれた時にも、記憶は受け継がれた。

千葉で生を受けた朗にも、同じ記憶があった。紗の被衣から垣間見えた紅の口元、黒曜石の瞳から溢れ出た涙、白い絹の亀甲紋ににじみ出る鮮血、青翡翠の勾玉。商品の販売や、採用試験、それに総務部のきれいな女性とのデートなどのごく普通の生活の裏側に、瑠璃媛がいた。朗はその幻影を無視できなかった。

早良ゆりにはじめて会った時に、朗にはこの女だという直感があっ

た。履歴書から感じる乳白色の帯電感、ゆりの周りを包む薔薇色の大きな氣、『見える者』であることをひた隠しにしている慎重な態度。疑わしき点はいくらでもあった。だが、新堂朗がようやく真実にたどり着くにはさらに五年を要した。

少なくとも朗は自分が人事部にいた意味を見いだした。それはゆりに出会うためであった。そして出会ったそのときに、その役目は終わったのである。朗はもう百貨店にいる意味はないのだと感じた。それでこの五年間に新たな人生のために着実な準備を進めてきた。瑠璃媛またはゆりを手に入れることができそうになかったので、それ以外のことで人生に意味を残したかった。『見える者』『祓える者』としてその能力を生かそうと思った。そして選んだのが神職となることだった。資格を取り、経験を積み、ついにゆりをあきらめて移住を決めた。暑い夏のさなかだった。

ゆりは自分からやってきた。運命に引き寄せられるように、全てのことが同じ時期に収束した。そして、秋が始まる頃、二人は東京に別れを告げて、この京都の笠宮神社で新婚生活をはじめていた。

不思議な若者

新堂朗に初めて遭った日のことを峯岸裕次は忘れないであろう。京都の小さいながらも由緒ある笠宮神社の跡継ぎとして生まれた現宮司の峯岸は今年で五十一歳になる。神職を自分の天職と思いながらも世界情勢や異文化にも興味のある進取の氣質を持った朗らかな人物だった。カトリックの神父とも交流を持ち、時には作務衣姿で京都の教会に出かけてゆき、個人的に興味のあるロマネスク建築について教えを受けたりする変わった神主でもあった。

一方、新堂朗は千葉の浄土真宗の寺の家に生まれた青年である。父親の新堂沢永という男がかなり変わっていて峯岸宮司とは二十年ほど前より親交を持っていた。この沢永和尚は加持祈祷で名を知られた存在であり、邪霊や呪詛に悩む相談者が後を絶たないのであった。峯岸宮司も若い頃から憑霊祓いで有名であり、その縁で僧侶と神主でありながらも親しい関係を結んでいた。

沢永和尚は若い頃に妻を病氣で失っており、息子の朗を男手一つで育てたという。

「手のかからない子でな、後妻をもらわなくても問題なかったわ」

峯岸がいまから十五年ほど前に初めて和尚の寺を訪ねていった日のことだった。酒と肴を勧めてくれながら和尚はからからと笑った。東京の大学に通っているが、その日は休みに入るのでもうじき帰ってくるだろうということだった。

半刻もするとバイクのエンジンが近づいてきて寺の裏手に停まった。

「帰ってきたぞ」

和尚があごで示した先に、Kawasakiの車体と似た黄緑と黒の革のスー

ツを着た青年が黒いヘルメットを脱いで近づいてきた。それが朗だった。

短く刈られた黒髪は剛そうだった。意志の強そうな下三白眼が濃いめの眉の下でじっとみつめる。まっすぐな鼻梁のはじめにわずかに隆起した剣鼻は意志の強さを示していたが、口の両端がわずかに上がりその湾曲が親しみやすかった。背が高く引き締まった体の線は革のスーツで魅力的に見え、大学ではさぞもてるに違いないと思った。その一方で、うかつには近寄りがたい不思議な雰囲氣を持った青年だった。肉体的な若さと精神的な落ち着きが同居している。自分の欲していることは全て理解している、そんな印象だ。少し切れ者過ぎる感じもした。今どきの大学生にはなかなかいないタイプだった。しかし、朗はきわめて礼儀正しく挨拶をした。一方でたくさん語ることは苦手のようで、早々に切り上げようとしているのが見て取れた。

その時、表門で騒ぎがはじまった。何かに憑かれて暴れる家族を連れてきた者が和尚に助けを求めてきたのだ。和尚は峯岸に無礼を詫びてからすぐにその一行のもとに向かった。興味があったので峯岸も朗と一緒に後を追った。

和尚はすぐに祈祷をはじめ、霊は苦しみながら女から出て行くまいともがいた。が、突然はねとばされると、峯岸のいる方向に向かってきた。峯岸が身構えた時には、すでに朗が反応していた。自分の氣の一部を剣のごとく尖らせて霊に切りつけたのだ。その霊は霧散してしまった。一瞬の出来事だった。峯岸は自分の目が信じられなかった。それは峯岸の家に代々伝わる秘技『氣剣の法』と全く同じ憑霊祓いだった。

新堂朗が連絡してきたのは、それから十年ほど経ってからだった。神職の資格を取るために通信教育を受けたいのだが、それに必要な推薦をしてくれないかというのだ。寺の息子なので神職の知り合いがほとんどいない。だが将来的に神職に就きたいと考えているという相談だった。峯岸宮司はさほど驚かなかった。話した機会はさほど多くなかったが、会うたびに朗は仏教よりも神道の知識が深いことに氣がついていたのだ。そういえば和尚は息子が大学を卒業した後、東京の百貨店に就職したと言っていた。寺を継ぐのではないのかと訊いた峯岸にとんでもないという顔をして首を振った。その時にも妙に納得が入ったものだ。

朗は峯岸宮司の推薦状を得て神職養成の通信教育を受け、百貨店の仕事を続けたままで正階の検定試験に合格した。その前後から、祭りの時期に休みが取れれば率先して笠宮神社にやってきては手伝ってくれるようになった。もともと朗には神社の家で育った者と錯覚するような自然な立ち居振る舞いがあった。動き一つ、禁忌一つ、先輩の神職が指導する必要がなかった。資格は必要だからとったが、そもそも試験をする必要もないほどありとあらゆることに精通していた。

しかも、峯岸は遭ったその日すぐに氣がついたことだが、新堂朗は『見える者』であり『祓える者』だった。全ての神職にその能力があるわけではないし、実際に憑いているモノを祓う能力があるものは更に稀だ。正直言って、笠宮神社に奉職する者のうち、それができるのは峯岸宮司の他にはいなかった。もちろん神社の仕事はそれだけではない。笠宮神社の禰宜らはみなきちんと仕事をし、峯岸宮司はそれに満足していた。だが、峯岸宮司に祓いができるために、笠宮神社では

年々その需要が増えるようになっていた。ちょうど新堂和尚のもとに次々と加持祈祷を願う者が集まってきたように。それはそれで構わないのだが、そのために峯岸宮司は神社を数日以上は離れられず、長いことの夢を諦めざるを得ないでいた。しかし、新堂朗の出現で新たなアイデアが浮かび上がった。

ある時、祭りの後の直会で宮司は朗に話しかけてみた。

「お前、ずっとこういう臨時神主のままでいるつもりなのか？」

新堂はほとんど酔った様子を見せない男で、いつもと変わらない調子で慎重に言葉を選んだ。

「いいえ。いつになるかはわかりませんが、退職して、年間を通して奉職できればいいと思っていますよ」

「いつになるかって、受け入れてくれる神社があればということか。それともまだ百貨店勤めのほうがいいということか」

「受け入れてくれる神社の問題はありますね。でも、それ以前にまだ退職できない事情があるんですよ」

「人事部の仕事か？」

「いいえ」

間があった。

「ひとつだけ、どうしても確かめたいことがあるんです」

その内容を朗はそのときは語ろうとしなかった。例の朗を包む青紫の極陽の氣が強くなった。宮司はこの氣のことも長らく氣になっていたのだが、この時はその問題は無視して続けた。

「俺はな、お前さえその氣があれば、うちにきてもらいたいと思っているんだよ。引っ越してもらうことにはなるけれど、お前にとっては悪い話じゃないだろう？」

「でも、こちらには十分な数の先生がいらっしゃるじゃないですか」

「うん。でも、それは今の体制での話で、一人いなくなるととても手が回らなくなるんだよ」

「どなたがいなくなるんですか？」

「俺。二年間の限定だけど」

新堂朗は宮司の意図をわかりかねるというように見上げた。

「俺はね。若い頃からの夢でどうしてもヨーロッパのロマネスク建築を見て歩きたいんだよ。つまり二年間限定のお休みだ。まつりのことなどは佐竹先生にお願いしておけば全て上手くまわる。裏のことは、妻がちゃんと仕切れる。表の手の足りない分、誰か新しい神職を雇うことが必要だが、それをお前にどうかなと思っているんだよ。お前は二年間経験を積みながらその後の就職に備えられる。まあ、うちに空きがでればそのままいてくれてもいい。しかし、何よりも俺がお前に期待しているのは、お前にしかできないことだ。うちには年間相当な数の憑霊祓いが持ち込まれる。今の所、俺はお前以外に代わりを頼める神職を知らないんだ。だからお前がうんと言ってくれない限り、俺はどこにもいけないってわけだ」

『荒ぶりし氣』

この夏のことだった。会社に辞表を出した後、笠宮神社への就職・引越などの相談をしに、新堂朗は週末に京都に来ていた。峯岸宮司は始終上機嫌だった。夜に朗と二人で京都の町に飲みに繰り出すと、ずっと氣になっていたことを口にした。

「お前、女の方はどうなんだ」

朗は意外そうに、峯岸宮司の顔を見た。質問の意図を諮りかねているようだった。

「お前、しばらく女と寝ていない、そうじゃないか」

朗は否定しなかった。

「まさか、童貞ってことはないだろう？　女がダメなようにも見えないし」

朗は困ったように答えた。

「童貞でも同性愛でもありませんよ。性欲もあります、普通に」

「余計なおせっかいだということは、わかっているよ。だが、ここ数年のお前の氣の変化がひっかかるんだよ」

「氣の変化？」

「お前の氣はもともと陽に傾いている。男としては普通だ。だが、それが強くなりすぎると『荒ぶりし氣』になる。ここ数年のお前には強い『荒ぶりし氣』がある。憑霊払いなどをすれば氣は更に荒れる。『荒ぶりし氣』を中和するのは『和みし氣』だ。滝に長時間あたるなどして『荒ぶりし氣』を和めることもできる。だが、お前のように都会に住んでいて、浄めにも限界のある生活を続けているものには、現実的とは言えない。だからいいのは女なんだよ」

朗は峯岸宮司の会話の意図がつかめた。

「どんな女でもいいというわけではない。陽の氣が強い女などと定期的に寝ては、さらに氣が荒ぶるだけだ。だが、陰の氣が少し強い女と交わることには、滝に二時間以上あたる以上の効果がある」

黙って口もとをきつく結んでいる朗に宮司はさらに優しく言った。

「誰にでも事情がある。だからそう簡単に『荒ぶりし氣』のためだけに女を求めるわけにもいかないのかもしれない。だがな、朗。お前は若くて健康な男だ。健康な性欲の発散は健康な精神に通じる。神職にある者でも人間である以上それは変わらない。俺には、お前が禁欲によりすぎているように見える。好いた女と簡単に寝ることができなければ、商売女と寝たって構わないんだ。まあ、この界隈だと噂にはなるだろうが」

朗は峯岸宮司の言葉に微笑をみせた。峯岸の妻牧子はもの静かでよくできた女であったが、この界隈で夫が商売女のもとに出入りするなど到底許さないだろう。それと同時に、宮司夫婦のバランスのことが、朗にははじめて理解できた。峯岸宮司のもとにはよく憑霊祓いが持ち込まれた。朗も何回かその現場に立ち会っていて、その度に峯岸宮司の氣は荒れるのだった。だが、その荒れた氣を峯岸は翌日まで持ち越さなかった。人望厚く人好きのする宮司に必ず戻っていたのである。峯岸牧子はぽっちゃりとした体型で特に美しくもなかったが、やはり人望が厚く優しく氣のつく人柄が皆に好かれていた。彼女が宮司の氣を和ませていたのだ。直会のときなど彼女に注いでもらった酒を飲んでいると自分でも氣が和むのがわかったことを思い出した。

「お前、好きな女がいるのか」
「はい」
朗はためらわずに答えた。
「手を出していない、そうだろう」
「出していませんね」
　宮司は呆れたように朗を見た。朗は魅力的な男だったから、女を落とすのに苦労があるとは思えなかった。実際、ゆりが入社してくるまでの十年間、朗は女に不自由したことはなかった。デートに誘って断られたこともほとんどなかったし、向こうから寄ってくることも多かった。心などなくてもセックスを楽しむことはできたし、恋をしたこともあった。セックスに『荒ぶりし氣』を和める効果があるとは知らなかったが、確かに当時はあまり自分の心に燃える行き場のない怒りの炎に悩まされたことはなかったようだ。
　だが、採用試験の場に早良ゆりが現れたあの日以来、新堂朗の性生活は完全にストップしてしまった。ゆりを想って自慰をすることはあっても、他の女と寝ることは考えられなかった。近づいてくる女は相変わらずいくらでもいたが、新堂朗にはなんらかの制御弁がかかってしまうのか、そういう関係になることはなかった。ゆりへの恋心や性欲とは別の次元で、他の女に対する性的な活動すらもが止まってしまったのだ。ポルノ雑誌などを見て勃起することはあるが、射精にはいたらない。長いこと試してみたがダメだった。ゆりへと想像を向けてはじめて射精に至るのだった。これでは女とつきあうどころか、商売女の所にいくのも時間の無駄に違いない。朗はしぶしぶその辺の事情をかいつまんで宮司に話した。
「つまり、社内のずっと年下の女の子に惚れて、他に手が出なくなったと？」
　どこの中学生の発言かと思うようなことを、よりにもよって新堂朗の口から聞いて、峯岸宮司はとまどった。
「で、お前はその娘さんをただ遠くから見つめているだけなのか？　何年間も？　なぜデートに誘わない」
「避けられているんです。それに彼女には同じ職場に優しい婚約者がいます。四万十川も真っ青になるくらい清浄な氣を持った男で、彼といれば心が和むこと間違いなしです。勝ち目はありませんね」
　峯岸宮司の目は宙を泳いだ。勘弁してくれという表情だ。
「悪いことはいわない、朗。その娘さんはあきらめろ。この世にはこんなにたくさん女がいる。もの静かで芯の強い、優しい女を他に探しなさい。今のお前にはそれが第一命題だ」
　朗の心は沈んだ。もの静かで芯の強い優しい女。早良ゆりほどこの言葉が当てはまる女に、新堂朗はまだ会ったことがなかった。たとえこれから会うとしてもゆり以上に他の女を欲せるとは到底考えられなかった。

告白

「お前、なにがあった？」
その第一声に朗はひるんだ。
「例の、『荒ぶりし氣』がすっかり消えている」
峯岸宮司はいぶかった顔で朗を眺めている。
　あれから二週間も経っていなかった。引越して来た朗はすっかり変わっていた。体を包むようにして存在していた、とげとげしい極陽の氣が感じられなくなっていた。その代わりに、朗らかでしなやかで健康な陽の氣がみなぎっている。
「はあ、その……」
朗は観念したように息を飲むと、半ば目を閉じるようにしてひと息に打ち明けた。
「結婚することになりました」
　宮司は数秒間、何も言わずに朗を眺めていた。朗は困ったように目を上げて宮司の反応を見た。宮司は口を半開きにして目を見開き、朗のいった言葉を理解しようと努めていた。やがて氣を取り直すと訊いた。
「誰と？　まさか例の娘さんとか？」
「……はい」
　宮司は楽しくなって来た。いつも澄まして構えている朗がこれほどうろたえた姿を見せるとは。
「清流の氣を持つ婚約者はどうしたんだ、お前が決闘で倒したのか？」
　朗は困った顔をしながら、短く答えた。
「婚約は解消したんだそうです」
　これでは何もわからないが、それでも峯岸宮司は嬉しかった。
　それと同時に大きな疑問を持った。いくら想いが通じたからと言って、わずか十日ほどであの『荒ぶりし氣』が簡単に消えるのだろうか？　朗が連れてくるという結婚相手に急に興味がわいた。
「その娘さんは、ただの女の子じゃないだろう」
　これは朗には不意打ちだったようだ。はじかれたように宮司を見ると、何か言いたそうにして、また口を閉じた。しばらく考え込んでいたが、それから覚悟したように口を開いた。
「実は、お話ししておかなくてはならないことがあります」
　朗は話し始めるまでに再びしばらく間をあけた。何から話していいのか、考えあぐねているようだった。それから静かに訊いた。
「奥出雲の樋水媛巫女伝説はご存知ですか」
　あまりに唐突に話が飛んだので、峯岸宮司は驚いたが、出雲ゆかりの神社の宮司として、もちろんその伝説は知っていた。
「龍王に仕えていた媛巫女が都の陰陽師と駆け落ちして死んだ伝説だろう？　平安時代の話だったか」
「はい。件の陰陽師安達春昌は方違え中の殿上人の供として、出雲に出向き、そこで右大臣の北の方に憑いたキツネを祓えと命じられました。一人で神事を執り行うには役不足であったため、この地で媛巫女と崇められている樋水龍王神社の瑠璃媛に助けを乞い、その時に媛と恋に落ちたのです」
　峯岸宮司は、いぶかしく思った。そんな詳しい話はきいたことがなかったのだ。朗は宮司の答えを待たずに続けた。

「龍王に仕える身で男に懸想するなど許されぬこと、また瑠璃媛は樋水龍王神社開闢以来の御覡でその名は京にまで届くほどでした。名もなき陰陽師との恋など話にもなりませんでした。春昌は都での出世と媛との恋のどちらをも諦められませんでした。媛の並ならぬ力が出世に役立つという計算もありました。それで龍王への忠誠と恋の間で揺れる媛に京都へ一緒に登ることを焚き付け、媛を盗みだしました。当然ながら尊い媛巫女を取り戻すべく追っ手が向けられ、盗人である陰陽師の命を狙いました」

峯岸宮司は、新堂朗が震えながら話しているのに氣が付いた。

「瑠璃媛は言っていた、神域を離れたら十日と生きることは叶うまいと。馬鹿げたことを言うなと私は笑った。しかし、彼女は知っていたのだ。私を狙った矢を受けて、瑠璃媛は命を落とした……」

……私？　安達春昌の神憑り状態になっているのか？　宮司は朗の伏せた顔を見ようと身を屈めた。だが顔を上げた新堂朗には何も憑いていなかった。

「私は愚かで傲慢だった。それ故に罰されたのです。千年にわたり、繰り返し生まれ変わり、その記憶をなくすことができなかった。信じてほしいとはいいません。途方もない話です。しかし、私は常にその記憶とともに生きてきたんです。そして彼女をみつけた」

「ってことは、お前が結婚するのは……」

「はい」

どう返事していいものやら、峯岸宮司は戸惑った。ようやくこれだけのことが言えた。

「道理で清流の君を押しのけられたわけだ」

朗が千年前の陰陽師の生まれ変わりかどうかはどうでもいい。峯岸はそう思った。当事者二人がそう信じているならば、部外者には入り込む隙はない。それに、いまの話が真実だとしたら納得のいくことがいくつもある。新堂朗の時間を超絶した不思議な存在感、何も学ぶ前からやけにこの道のことに詳しかったわけも、笠宮神社の秘技である氣剣の法と同じ禊切りを習いもせずに自由に使えることも全て説明がつく。そして、伝説の媛巫女ならば、数日の間にあれほどの『荒ぶりし氣』を浄めることができるのかもしれない。

峯岸宮司は『見える者』として生まれてきた。神職の家に生まれてきたので自分が神社の禰宜として、ひいては宮司として神に仕えることは至極自然だった。憑物の存在や禊には何の疑問も持たずになじんできた。目の前に茄子やカボチャが存在するのと同じように、それらを受け入れてきた。輪廻転生についてはそれほど『当たり前』ではないのだが、そうであってどこが悪いのだと思ってきた。いま目の前に「前世を憶えている」という若者がいる。つきあいが長いわけではないが信用できる男だ。だからこそ、そんなことを言い出したことに戸惑いがあった。しかし、宮司は既に彼の言葉を信じ始めている。奇妙な感覚だった。

「それで」

峯岸宮司は、優しく先を促した。今まで一言も言わなかった新堂朗がこのように正氣を疑われるようなことを口にしなくてはならなかったのは、何か訳があるはずだ。

「こちらで結婚式を挙げていただく前に、天の御柱めぐりでもなんでもして、神意を諮りたいのです」

「なぜ」
「瑠璃媛のようには失いたくないからです」
瑠璃媛は聖なる存在だった。単に格式ある神社の巫女というだけではなく、龍王に仕える選ばれた御覡だった。幼少の頃から並ならぬ能力を発揮し、玻璃の玉を用いて未来を読み、邪霊を封じ込め、龍王を喚び憑りその意を伝えることのできる唯一無二の存在であった。そのために今でも奥出雲の樋水龍王神社では瑠璃媛は神として祀られている。春昌はその媛を盗み、穢した。どれほど誠の心で愛したとしてもその事実は変わらなかった。
天罰はてきめんだった。千年経っても、瑠璃媛が命を落としたときの禍々しい記憶は昨日のことのように激しく朗の心を突く。そして、常に生まれ変わった瑠璃媛を捜すが、決して願いは叶わなかった。千年分の記憶は、一人の人間が名を為すには多すぎるほどであったが、全ての安達春昌の生まれ変わりの男は、天下で名を為すこともできなかった。ただ、生涯を失われた女への贖罪と渇望にあて、満たされぬ思いのまま終えた。
この罰に終わりがあるのか、その罪が許されたのかどうか、新堂朗にはわからなかった。もし、許されていないのだとしたら、ゆりと寝ることは二重に彼女を穢すことになる。自分が罰せられて即座に命を失うならそれでも構わない。だが、自分のためにゆりが命を落とすことには堪えられなかった。朗がゆりの心を得たと知って結婚を約束した日から、今に至るまで体の欲望を押さえているのはこのためだった。ゆりが自分を求めているのも感じている。できればあの日すぐにでもホテルにでも向かい思いを果たしたかったが、かなりの精神力を発揮してそれを押さえ込んだ。だが、それがいつまで持つかは自信がなかった。だからこそ、一刻も早く神意を得て、堂々とゆりを自分のものにしたかった。もし、神意が二人の意志に反したものだったとしたら……。新堂朗はゆりを諦める他はないだろう。だがそれについては考えたくなかった。
新堂朗にとってゆりは瑠璃媛であって同時に別人だった。ゆりは瑠璃媛のように匂い立つような美貌は持っていなかった。瑠璃媛の持つ聖なる者としての絶対的な自負も持っていなかった。その目の奥には芯の強さが潜み、心地よい清冽な朗らかさを持っていても、どこにでもいるような地味な女だった。それでも、二人の女がいま目の前に同時に立ったとしたら、朗は迷いなくゆりの手をとるだろう。朗は心も体もゆりを征服したいという思いに燃えていた。
ゆりをよく知るものは、ゆりの人間としての良さを認め、妻にするのによい女だとは思うだろう。男が性的に惹かれる女の多くが男を破滅に導くような危険な存在であるのに対して、性的な魅力は多くないものの、男にとっての安全で静謐な港となる類いの女がいる。早良ゆりの印象はそのようなものだった。
例えば、高橋一がゆりと付き合い、やがて婚約をしたときも、周りは高橋が賢明な選択をしたと思った。だが彼らは同時に、新堂朗がこれほど長いこと早良ゆりに執着していたことを理解できなかった。朗自身にも己に対するゆりの魅力は説明がきかなかった。かつて朗がつきあったどのような女ともゆりは違っていた。ゆりの顔のあらゆるパーツはバランスよく整ってはいて美人といってもかまわないのだがまったく華がなく、誰かに指摘されなければ顔立ちのよさが目に留

まることもなかった。何度も会ったことのある人ですら、ゆりがどんな顔だったか思い出すのも難しいのだった。化粧はほとんどせず、立ち居振る舞いも目立った所がなく、何を考えているのか推し量るのも難しかった。ゆりは命じられたことや期待されていることをほぼ完璧にこなした。だが、周りの嫉妬を呼ぶほどの出過ぎた振る舞いは一切しなかった。私服にせよ制服姿にせよ、彼女は誰にも見つからないような没個性を作り上げる天才だった。社員旅行や企業大会などでいつの間にか誰にも氣づかれないようにその場から居なくなる特殊能力があった。

しかし、『見える者』が五感を押さえて、その特別な眼力で場を見ると、ゆりをみつけるのはとても簡単なことだった。ゆりの周りには輝く淡い薔薇色の氣が満ちている。一キロメートル離れていても見えるほどだ。同期の女性社員の恋愛話や昨晩のテレビドラマの話をそつなく受け答えしながら、彼女の精神活動は遥か彼方を泳いでいるのがわかるだろう。だからといって現実の世界を否定しているわけではないのだ。ゆりという女性は自由に二つの世界を行き来する能力を身につけているらしかった。新堂朗は現実の視覚と聴覚でゆりを観察し、五感を超えた『見える者』のアンテナでも観察した。前者は瑠璃媛と正反対でありながら、後者は瑠璃媛とほぼ同じであった。このギャップに驚きながらゆりを観察すればするほど、朗はゆりにとらわれていった。個性のないはずの顔立ちは清らかで好ましいものと映るようになり、女性社員たちに向けるそつのない受け答えに感情を押し殺した優しい暖かさを感じられるようになり、高橋一に向ける心からリラックスした笑顔から目が離せなくなった。ゆりの笑顔は、女性としてのゆりの魅力を認めない男でも「あれはいいよな」と認めざるを得ない特別な心地よさがあった。

それに加えて、ゆりが朗を捉えて離さないのは、その孤立感だった。世界に他に属するところを知らない、ゆりの救いのない孤独を、朗はその特別な感性でごく初期に感じられるようになっていた。朗はその感覚を誰よりもよく知っていた。ゆりが瑠璃媛の生まれ変わりかはつい先日までわからなかったが、『見える者』であることは疑わなかった。『見える者』の世界は一般の人たちには受け入れてもらえない。それゆえに同世代の子供たち、若者たちと心から信頼しあえる関係が築けない。父親が『見える者』であった朗と違い、ゆりは誰にも理解してもらえない長い時間を過ごしてきたに違いない。ある種の憐憫が朗を捉え、そのまま朗は完全にゆりの虜になってしまっていた。

峯岸宮司はたくさんの結婚式を執り行ってきたが、友人どころか両親まで来ない結婚式は生まれて初めてだった。新堂和尚はこの結婚に大いに賛成であったが、急なことで寺を離れられなかった。早良ゆりはぎりぎりまで家族に結婚のことを打ち明けておらず、親や姉弟が式に列席することを望んでもいないようだった。だが二人のことに理解のないゆりの家族が来ないことはむしろ幸運だった。来られても、そもそも峯岸宮司にすらこの結婚が成立するのかどうかはわからなかったからである。

特別の神事が先だって行われる。この笠宮神社には表に知られていない秘密の神事がいくつかあった。その一つが憑霊に対する『氣剣の法』であった。もう一つの秘技は特別な神意を問うための『神問い』だった。この秘法はそもそも出雲から伝わったとされている。巫女に

神下しをし、重大な質問に対しその答えを問うのである。神は笠宮神社の主神である大国主大神、少彦名神、そして神社庁が別格扱いする神宮の主神である天照大神である。このような特別の秘技にはアルバイトの巫女などは使えないので、峯岸牧子が代わりを務める。もちろん一般人には見せられない。従ってゆりの家族が来ないでくれた方がありがたかったのである。斎主でありサニワとなる宮司と神憑りのミコトモチを務める牧子、そして当の二人だけが『神問い』に臨み、首尾よくいけばその後婚儀が執り行われるという段取りを立てたものの、そもそも『神問い』を実際に執り行うのは宮司も初めてなのだった。一度、父親の亡き先代が執り行った時に同席したことがある。それほど稀にしか行わない神事であった。

神問い

「これを三つ用意し、水を満たす」

峯岸宮司は直径四十⊙あろうかという朱塗りの椀を見せた。「それに榊の葉を三枚」トランス状態になった御言宣伝者がそれぞれの神に憑かれた状態で、一枚ずつ榊の葉を上から椀に満たした水の上に落とす。三枚とも表なら大是、三枚とも裏なら大否である。二枚が表なら是となる。

「是ならそのまま神前に進み、否なら残念だが拝殿の用意は撤収だ」

朗は頷いた。それから宮司は本殿の裏にあり普段は誰も足を踏み入れない『かくし幣殿』とよばれている部屋を目で示した。「『神問い』は、あそこでやる。君たち二人と、ミコトモチを務める牧子、それから審神者として私の四人だけが入る。あそこは特別な空間だ」

「というと？」

「あそこで神事を行うと根の道が開く。つまり、出雲との間にトンネルが開いて大国主大神と少彦名神が通られる、ということになっている」

朗は、小さな部屋を横目で見た。

奇妙な結婚衣装だった。通常、神職にある者の正装は衣冠で、新堂朗の場合は浅黄平絹袴に緑殻無文の袍、黒羅遠文の冠を、相手のゆりは神職でないので色のついた十二単であった。ところが、二人は『神問い』で神の前に直接出るために、白を着ることになっていた。したがって朗は全て純白の斎服を着用することになった。斎主の宮司も当然斎服なので、誰が花婿だかわからない。しかもこの神事は完全な秘

技のために、花嫁衣装の着付けも外部には頼めない。そのためにゆりには急遽誂えさせた純白の単衣、白い袴、そして襟のみ重ねた略式の五衣、表着もすべて無紋の白で用意し、垂髪の鬘を用意し、佐竹禰宜の妻が着付けを手伝った。

たった一度のためだけにこのような衣装を正絹で用意するのは大変な出費だったが、レンタルができるようなものではない。

「お前はよく使う斎服だからいいけどな。だが、ゆりさんも二年間でこの衣装がときどき必要になるかもしれないぞ。あの部屋に入る時にはいずれにしても白だからな。牧子のようにミコトモチを務めたり『水晶籠』をしたりする時には、五衣以外を着れば女の斎服みたいなものだ」

笠宮神社の禰宜や巫女たちは、時おり秘密の神事が行われることには慣れていた。だが、こんな奇妙な婚儀が行われるのは(もしかしたら行われないかもしれないのは)はじめてであり、拝殿の中で奇妙な面持ちで待っていた。修祓のあと、四人は『かくし幣殿』に入っていった。

『かくし幣殿』は本殿のご神体を納めた部屋の裏にあるので他の全ての建物や部屋と向きが反対になっている。つまりご神体の方を向く。普通の参拝客はどちらにしても本殿にまでは来ないので、このような特別の空間の存在はまったく知られていなかった。窓がないので燭台が並べられていた。蝋燭の明かりに浮かび上がった三つの三宝にそれぞれ朱の椀が載っている。朗とゆりはその前に座った。ミコトモチの牧子が二人の正面に、サニワをつとめる峯岸宮司は脇に座った。

峯岸宮司の祝詞に続いて、新堂朗が祈祷を読み上げる。それから宮司が『神問い』の天照大神を呼び出す呪文を繰り返し唱える。次第に牧子はトランス状態となり、やがて一つ目の榊の葉を持って立ち上がった。天照大神の答えである。

上からはらりと落とされた葉が水に着地するのを、ゆりは目を見開いて見ていた。葉は落ちるまでに何度も翻り、静かに表を上にした。思わず安堵のため息が出る。横目で朗を見たが、真剣な顔で椀を見ているだけだった。

葉が落ちるとほぼ同時に牧子は一度床にひれ伏した。峯岸は動じずに二つ目の呪文を唱え始めた。大国主大神の番である。やがて牧子は再び立ち上がり、先ほどとは打って変わって荒々しい仕草で榊を持ち上げた。榊はほとんど翻らずにすっと落ちた。明快な「否」であった。ゆりは息を飲む。朗の額もわずかに歪んだ。出雲の神にまだ罰が足りないと言われているような氣がした。

峯岸宮司は、それでも神事を続けた。少彦名神の呪文が辛抱強く唱えられる中、ひれ伏していた牧子は再び榊を取り上げて立ち上がった。細かい妙な足さばきで三つ目の三宝の前に立つと、榊の葉を落とした。今度の葉は、もっともたくさん翻りながら落ちていった。三人は息を殺して見守った。ほんの数秒、しかし、永遠にも感じられる時間をかけて、葉は水に着地した。新堂朗は裏が上を向いているのを見た。激しい痛みにも似た失望が身を貫く。

だが、その時、予想していないことが起こった。牧子の後ろ、何もないはずの空間から、突然一陣のつむじ風が巻き起こった。窓もなく風などおこるはずがないのにである。乳白色に光る何かが『かくし幣殿』の小さな空間を一周してそのまま元の場所に戻って消えた。ほん

の二秒ほどのことだった。蝋燭が激しく揺れたが、どの燭台にも炎が残っていた。意識を失っている牧子以外の三人がおこったことを理解しようとして見回したが、『それ』はもうどこにも居なかった。
　我に返った峯岸宮司が三つの椀に目を戻すと、全ての葉が表を上にして水面に漂っていた。
「あれでいいんだ」
あとで宮司は新堂朗に言った。
「でも、見たでしょう。少彦名神も否と……」
「わかっている。だが、結果を翻したのは我々ではない。『あれ』が何だったにせよ、あの空間にやってきて我々に明快な意志を示したのは神域に属する存在だった。二柱の神が、それに反対ならさらにひっくり返しただろう。三枚とも表を向いていた。私がサニワとして判断すべきことにははっきりとした回答がもらえたんだ。心配するな」
　峯岸宮司は、そういって自分にも言い聞かせていた。父親がとりおこなった『神問い』の時、自分は信じていなかったのだと今になって氣がついた。結局、コインを投げるのと同じだと思っていたのだと。あの部屋が根の国とつながっているというのも、心の底では信じていなかったのだ。だが、あの時には確かに何かが現れた。三柱の神が現れたかどうかはわからないが、他の者が現れるのならこの神社の主神が現れないというのも妙な話だ。
　二人の婚姻は、もう成立してしまった。あれから一週間経つが、その後何も不穏なことは起きていないので、あれでよかったのだと思う。他の禰宜や巫女たちの顔を思い出す。我々四人の納得のあまりいっていない顔をみて、早とちりの佐藤は撤収をはじめようとしたぐらいだ。だが、今はもう、全てが収まる所に収まった。
　新堂朗とゆりはこの神社の一員として、敷地内の小さな家で新婚生活をはじめた。朗は祈祷を他の神職たちにまじってこなしだしていたし、ゆりは牧子にしっかりとついて、神社のいろいろな雑務の手伝いをはじめている。掃除や、授与品の準備や、各種の宴会の時の炊事全般など、神社にはいくらでも女手が必要だった。夫婦としてみていても微笑ましい。峯岸宮司は二人の様子を見て、これなら近いうちに自分は念願のヨーロッパ旅行に出かけられるなと安心した。
　何度か憑霊祓いが持ち込まれた時に、峯岸は『かくし幣殿』にゆりと朗を連れてゆき、二人の祓いをその目で見た。朗の『氣剣の法』は見たことがあったが、樋水の媛巫女に由来するという『水晶籠』を見たのは初めてだった。朗の祓いは宮司の目から見るとまだムラがあり、使うたびに無駄な陽の氣が『荒ぶる氣』になるのだが、ゆりとのコンビネーションをさせるととても安定するのだった。
　ゆりの朗に対する『和らぎ』は見事で、どれほど朗の氣が陽に傾きすぎても、ゆりはそれを浄化してしまう。目立たず地味な見かけに隠れて、この女性がこれほどの親和力が持つことに峯岸宮司はうなった。

『和みし氣』

新堂朗自身も、そのことに氣がついていた。神職や憑物祓いを仕事として選んだのは朗自身であった。その時は、ゆりと高橋一が結婚すると信じていたので、この仕事は一人で行い、一人で完結するのだと思っていた。だが、父親のもとでたまに祓いの手伝いをしたとしても絶対数は少なく、祓うことで自分の氣がこれほどに荒れるものだとは思い至っていなかった。笠宮神社に持ち込まれる憑物祓いの数はかなり多かった。最初の一ヶ月は、まだ宮司がいたので朗には事態がよくわかっていなかった。だが、峯岸がついに旅立つと全ての憑霊払いは朗が担当することになった。中には相当手強い相手もいて、朗の氣はこれまでにないほど荒れた。

だが、敷地内の小さな家に戻ると、そこにはゆりがいた。朗の氣の荒れた場所を、ゆりはきわめて正確に感知するらしかった。不思議そうに見ていたかと思うと、優しくこめかみに手を当てることもあった。そうすると朗の感じるともなく感じていた頭痛がすっと消えたりするのである。また、朗はそうした祓いをした日にはとても精力的になった。ゆりは朗に求められる時には決して拒まなかった。時間と空間が消えるような情熱的な時間を過ごしたあとに、朗は自分の中に熾った怒りやいらだちのようなものが消えているのを感じた。

やがて、朗は認めずにはいられなかった。この仕事は自分一人で、誰にも頼らずにできるつもりであったが、それは間違いであったと。もし、ゆりが高橋一と結婚していたら、もしくは、もしあの時の『神問い』の結果が違っていてゆりがここにいなければ、たぶん朗は精神的にもっと荒れていただろうし、滝にあたろうが何をしようが自らの『荒ぶる氣』に喰われてしまい、早いうちにこの仕事を続けられなくなっていただろう。

誰かに頼らざるを得ないというのは、朗にとっては一種の苦痛であった。これまで朗は全て自分の力で人生を切り開いてきたという自負があった。誰か他の人間がいなくても生きていけると信じていた。仕事も私生活も。だが、今ではどちらもゆりなしでは立ち居かないようになっている。

ゆり自身は、そんなことはまるで氣づいていなかった。これまでゆりは一人で必死に生きてきた。親元にいた時も一人暮らしをはじめてからも常に孤独だった。人には見えないものが見え、他の誰もが持たない記憶を持ち、自分の存在を肯定できなかった。そのため自分をつまらない、至らない人間だと卑下するようになっていた。そのために、この夏におこったこと、新堂朗と一緒になったということをあたりまえとは受け止められないでいた。朗はあらゆることに通じ、全てにおいて秀でて見えたので、自分が不釣り合いな存在だと思っていた。未だに何かの間違いで、じきに取り上げられてしまうのではないかと恐れていた。唯一自分に自信が持てるのは、『水晶籠』の術を使うときだけであった。時おり『かくし幣殿』で憑霊祓いをする朗がゆりに助けを求めてくることがあった。憑かれた人や物から霊を引きはがし水晶に閉じ込める『水晶籠』は、瑠璃媛の力を受け継いだゆり一人にだけしかできない特別な技だった。ゆりは凶暴な霊を相手にするのは怖かったが、少しでも朗の役に立てるのは嬉しかった。

神社の暮らし

ゆりはこの夏まで神社のことは何も知らなかった。神社に住むなどということは考えたこともなかったし、神職の妻が何をするのかなどということにも興味がなかった。それが、今は宮司の妻、牧子に教えを請いながら、少しずつそれらしきことをするようになっている。神社には実にたくさんの雑用があり、しかもそれは祭りのある時だけのものではなかった。

その必要もなかったのだが、ゆりもまた、ここに住み始めてからは日常的に和服を着るようになっていた。朗がほとんど洋服を着なくなったからである。

ゆりにとってかつて世界は夢と現実の二つに別れていた。夢の世界はゆりにとって何よりも大切だった。その世界は新堂朗という形をとって現実の方に進出してきた。しかも神社での生活をひきつれて。それで現在のゆりには別の世界区分ができてしまった。朗との生活および過去の記憶と、それ以外の世界である。夢の世界、『川のおじいさん』の思い出、朗とゆりのもつ特殊な能力、笠宮神社でのハレとケのあらゆる神事、峯岸牧子や佐竹禰宜や巫女たちなどは前者である。東京の実家、百貨店時代の仕事、銀座線、かつて住んでいたワンルームのアパート、学生時代の友人たちなどは後者である。洋服もまたその他の世界に属していた。夢の中で瑠璃媛と春昌はつねに和服だった。そして、現在の自分の周りに和服を身につけている人がとても多いので、自分も和服の方が自然に思えるようになってきた。

とはいえ、それまで和服を着たことはほとんどなかったので、早く身につけられて、洗濯も楽な二部式の着物とつけ帯のものからはじめた。また、作業の必要な時は木綿の作務衣を着るし、祭りの手伝いの時はアルバイトの巫女さんたちに混じって白衣に緋袴姿。たった数ヶ月とはいえ毎日身につけていたら立ち居振る舞いも着心地も断然違ってきたので、冬になってからは普通の小紋などもよく着る。「形から入る」とよくいうが、日常的に着物で暮らしているだけで、ゆりは自然にこの暮らしになじんでしまった。

朗はこれまた自然に神主生活になじんでいた。あたりまえのように白衣に袴か作務衣を着ている。憑霊祓い以外では一番の新米として祈祷以外の作業も当たり前のようにこなしていた。ほとんど自由な時間はないが、人事部時代もそうだったので大して苦にはならなかった。

レクイエム

その日は、二条の近くで葬儀があるというので、朗は時間をもらって外に出た。プライヴェートの用事で神社の外に出るときは洋服に着替える。特に葬儀で神葬祭でないときには一目で神職とわかるようななりはしていかない。この日は、大学時代の友人の葬儀だった。転勤で京都に移り住んでいたのでここ十年ほど会っていなかった。引っ越したので連絡をし旧交を温めた直後に、急に入院することになったと言われた。見舞いに行くために友人の妻に連絡をした所、緊急手術となり今のところ面会はできないと言われた。葬儀の連絡が来たのはその三日後であった。友人は強硬な無神論者だった。学内オーケストラのメンバーで、卒業メンバーのまとめ役をやっていたので、宗教的な葬儀のかわりにモーツァルトの『レクイエム』を演奏するお別れ会が催されることになっていた。朗はその会場に向かったのである。ゆりを連れていくことも可能だったが、朗はあえて一人で出かけた。どちらにしても友人とゆりは面識がなかった。

無神論者だった友人は、朗がよりにもよって神主になっていたことに驚いていた。友人にとって新堂朗はもっとも宗教から遠い所にいるように見えていた。ゆりと同じように、朗もまた、自分の『見える者』としての姿を可能な限り隠して生きてきた。実際に、この仕事に就くと決めるまでは、朗にとって『見える』ことは特に意味のあることではなかった。友人が神の存在を信じようと信じまいとどうでもいいことだった。自分にとってすらその存在はどうでもいいことだった。むしろ、見えないから「ない」と言い切れる友人が羨ましかった。

朗は何もないことにしたかった。千年前の因縁に振り回されるのは飽き飽きしていた。祈ったり呪ったりしても、基本的には何も変わらないことも知っていた。変わらないなら「ない」と思えた方が楽だった。自分がこだわり、苦しみ、手に入らないものに執着するのが馬鹿馬鹿しく思えた。だが「ない」ことにするのは不可能だった。千年分の記憶が、それを邪魔した。ただ、友人に対する友情は憧れのような形でそのまま残った。

『レクイエム』の演奏に耳を傾けながら、朗はふいに鎮魂や追悼とは生きているもののものであり、死者のためのものではないという思いに至った。輪廻の呪縛に千年も縛られてきた朗自身にとって、死とは何ら恐れるべき終わりではなかった。

若くして亡くなった友人に対する想いはある。これほど若くして、やりたいことを全て後に残して逝かなければならなかった彼の無念や、働き尽くめだった人生、報われなかったことへの不公平感など、友人の最後の数日間のことについて思いを向けると、錐で突かれたような痛みが走る。彼とはもう会えないという事実にも心はかすかな悲鳴を上げる。また輪廻の輪が交われば再びどこかで会うことがないとは言い切れないが、たぶん朗には彼の生まれ変わりとはわからないであろう。瑠璃媛一人を捜すのですらこれだけのエネルギーを必要とし、長いこと見つからないのだから、すべての生で知り合ったすべての人間と再び巡り会うことを期待するような氣は毛頭なかった。彼とはもう会えないであろう。心は痛んだが、痛んでいるのは朗の心であって、友人そのものは自分の死にも朗との別れにも心を煩わされるようなことはない。どこかへ行くという意識もない。朗は誰よりもそ

れをよく理解していた。
例えば人は「冬の間に自然は死んでおり、春になると息を吹き返す」という。実際には葉を落とした樹々が死んではいないように、肉体が活動をやめた人間に付随していた魂もそれですべてが終わりになる訳ではなく、新たな新しい生命への準備期間に入っただけなのであった。
友人の妻が身も世もなく泣き崩れている姿は氣の毒であった。朗には生きている人間の側だけに存在する悼みなどという話をするつもりはなかった。どんな考え方をしても、休まらない感情というものもある。それが生きている人間の運命だ。幾度も生まれ変わり、他の人より多くのことを見てきたはずの自分ですらその運命からは免れられない。ゆりが自分より早くこの世を去ることについて想いをめぐらせてみた。それは現実でもないにも関わらず、こらえようのない鋭い痛みとして朗の心を突き刺した。だがそれが今の自分のゆりへの想いから来るのか、それとも安達春昌が瑠璃媛を失ったあのときの記憶が突き刺さるのか、朗にははっきりと区別できなかった。
演奏の後、朗はわざと歩いて笠宮神社に帰った。半時ほどかかったが、平常心になおるためには、そのくらいの時間が必要だった。繁華街を避けて、人のあまりいない道を、街路樹を見上げながら歩いた。
冬の樹々は眠っていると人は言う。しかし、朗にはそうは思えなかった。たしかに夏のような生き生きとした活動はしていない。積極的に活動をしないけれども、動かずにこもっているからこそ力強くみなぎる力もあるものだ。その氣は内側に向かっている。朗の想いはいつの間にかゆりのことに移っていた。夏のあの日に、初めて抱擁を交わした時の爆発せんばかりのエネルギーはいまの二人の間にはない。そもそも結婚した人間がそのような情熱にうなされていては生活というものが成り立たない。しかし、それは二人の間の何かが死んだということにはならない。ゆりに対する朗の情は夏と冬の木立のように同じでありながら質の違うものへと変わっていた。表には出ないがその分深く深く内側で強く凝り固まっていくようだった。想いが通じなかったときの純粋な恋慕の衝動は明快な強いエネルギーとなって外へと向いていた。受け入れ先のない感情が猛烈に心を荒立てはしたが、その氣持ちに揺らぎがない分、心を暗くすることはなかった。
いまの想いはもっと別な種類のエネルギーであった。常に手の届くところにいて、望めばいつでも体の衝動をも満たしてくれる存在でありながら、ゆりは朗にはどこか手の届かない部分を抱えていた。それが何なのか朗には理解できなかった。言葉や態度で笑顔にすることができ、腕の中で肉体の悦びに震えさせることはできても、彼女の心には更に深く謎めいた部分があり、その扉を開けさせることはできない。
朗には一つの直感があった。この扉を開けることのできる人間は高橋一なのだと。一とつきあっていたときのゆりの氣はいまよりもずっとリラックスしていた。ゆりは男としての一には恋愛感情を持つことがついにできなかったが、それでも一を失うことをあれほどに恐れ、朗への想いに蓋をしていた。ゆりにとって高橋一は肉親よりもずっと大切な存在だったのだ。
朗にはゆりに対する猛烈な所有欲がある。かつてそれは単純に惚れた女に振り向いてもらえない男の願いであった。だからこそ、あの夏の日にゆりの心と体の両方が自分を求めていると知った時に完全

な勝利に酔いしれることができたのだ。だが、それは勝利で終わることはなかった。ゆりの愛を疑ったことはない。時折ゆりが見せる切ない目の輝きや、アルバイト巫女や氏子の女性と朗が話しているときに隠そうとしても出てしまうわずかな嫉妬のいらだちが朗に対する強い思慕を物語っていた。それに対して朗は鬱陶しく思うことはなかった。むしろ自分の中にあるゆりに対する不自然なほどの執着を後ろめたく思わずに済むとすら感じていた。

朗はこの千年の間、多くの女性と関係を持った。多くの女たちは、彼に肉体的な満足を与えてくれたし、また多くの女たちは心の安らぎをもたらしてくれた。幸せな夫婦として人生を終えたことも何度もある。だが、これほどの執着を持った女は二人、いや一人だった。瑠璃媛とゆりは同じなのだから。

一方で朗は瑠璃媛とゆりを完全に別人だとも捉えていた。自分と安達春昌も別人格と捉えているように。春昌は何年か経ってから瑠璃媛の死を受け入れた。決して忘れることはできなかったものの、その人生の隣に瑠璃媛がいないことを認めるようになった。自分にそれができるだろうかと朗は思う。ゆりを手離すことなどできるのだろうか。なぜ自分にはこれほどの妄執があるのか理性では理解できなかった。結婚して、妻として自分の側におきながらも、水を飲むことができない動物の如くひとりの女への想いに身を焦がす自分が理解できなかった。朗は自分が高橋一ではないことをはっきりと自覚していた。自分がどれほど望んでも、あの清らかな無欲の氣を持つことなどできはしない。そして、あの氣でなくてはゆりの心の奥の深く沈んだ暗闇を照らすことはできない、そのことを知っていた。それは『見える者』としての宿命であった。

『水晶籠』

「ゆりさん」

アルバイトの巫女が、走ってやってきた。ゆりはコンロの火を止めて割烹着を脱ぎながら玄関に向かった。

「どうしたの、ケイコちゃん」

「新堂先生が、来ていただきたいって。水晶と白衣でって、おっしゃってます」

ゆりはすぐに理解して、きちんと着替えた。何か朗だけの手に負えない『禍々しいもの』が来ているのだ。

朗のために『水晶籠』をするのはこれで十回目くらいだった。朗と自分の因縁が明らかになったのも、この技を使ったときだった。あのルビーについていた『禍々しいもの』は、今から思うとそんなに大物ではなかった。だが、ゆりはそれまでは自分で処理できる程度の小さな霊を移動させるぐらいしかしたことがなかったので、あの時には命をかけるほどの決意が必要だった。朗が『祓える者』であることも知らなかった。それどころか『見える者』だとも氣がつかなかった。

朗の生家の千葉の寺までの一時間のドライブで、ゆりははじめて朗と自分の縁に氣がついた。ずっと探していた『夢のひと』安達春昌は、ほかならぬ新堂朗だった。自分が朗を愛していることに氣づいたのもあの時だった。だが、この愛はゆりをとても不安定にさせた。

瑠璃媛とゆりには似た所はほとんどなかったが、この感情だけは全く同じと言ってよかった。ゆりには瑠璃媛のような神罰に対する恐怖はなかった。だが、神域を離れることへの恐怖は同じだった。ゆりにも神域があった。それは『川のおじいさん』との思い出であり、高橋一との五年間だった。朗を愛するために、ゆりは高橋一から離れなければならなかった。

どれほど恋い焦がれ、その優しさと強さにどれほど守られようと、ゆりにとって新堂朗は雪を抱く高い山のような存在だった。朗はゆりにとってできすぎた夫であり、厳しすぎる人生の師匠であった。どのような努力をしても肩を並べられるような存在にはなれなかった。高橋一のようにつまらないことで一緒に笑い転げられるような存在ではなかった。

それでもゆりは後悔したことはなかった。なんという縁なのだろうと思う。新堂朗が辞職して京都に行ってしまうという噂を聞いた時、彼自身の口から心の中に瑠璃媛ではない現実の女性を住まわせていると聞かされた時、ゆりの心はつぶれてしまいそうだった。ほかのどんなことにも堪えられるが、これだけには堪えられそうにないと思った。自分がふさわしい存在に思えず、望みがないように思われて、その場に崩れ落ちてしまいそうだった。あの時の苦しみに較べたら、どんなことでも堪えられると思う。男にとって女は全てではない。男が全てではない女もいる。だが、ゆりにとって朗は人生の全てだった。仕事も友情も思い出も家族ですらも、朗と生きる人生の付帯物に過ぎなかった。

ゆりは『川のおじいさん』の水晶を持ち、白袴に白衣の衣装で本殿に向かった。朗は『禍々しいもの』に憑かれた人と一緒に『かくし幣殿』に居るはずだ。案の定、『かくし幣殿』の前では、峯岸牧子が不安な面持ちで待っていた。

「よくきてくれたわね。ちょっと大変みたいなの。峯岸ですら祓ったこともないくらいの」
ゆりは不安だった。そんな恐ろしいものを自分が閉じ込められるのであろうか。そして、閉じ込められたとしても、朗は祓えるのだろうか。
『かくし幣殿』に入ると異様な氣が満ちていた。蝋燭の光は暗い光を投げかけていた。一人の女が壁の端にうずくまっている。暴れるのでもなく、騒ぐわけでもない。だが、その黒々とした異様な氣はその女がひどい状況にあることを示していた。女は恐怖で縮こまり完全に心を失っていた。黒い氣は女の周りを竜巻のごとく包み、口から出たり入ったりしていた。これでは朗が祓おうにも女を傷つけてしまう。
「ゆり、済まない。頼みたい」
入ってきたゆりに、汗でびっしょりとなった朗は頼んだ。ゆりは黙って頷いた。意識を集中して自分の氣を広がらせる。そして慎重に『禍々しいもの』を自分の氣で包む。異変を感じた『禍々しいもの』が抵抗して襲ってくるのと同時に、水晶を取り出し、自分の氣を使って水晶の中に押さえつける。ものすごい抵抗だった。だが、ゆりは必死で押さえつけた。ピシッという大きなラップ音がして、青白い閃光とともに『禍々しいもの』は水晶の中に囚われた。だがその抵抗はまだ続いている。ゆりは渾身の力を込めてそれを押さえつけた。
朗は、すぐに牧子を呼び寄せて、女を外に連れ出させた。一刻もはやく医者に診せなくてはならないと伝えて、再び扉を閉めた。グスグズしている時間はない。ゆりがどれほどの力を使っているか朗にはわかっていた。
朗はいつものように意識を集中して、自分の陽の氣を集めていった。それが剣のようになれば『氣剣の法』が使える。だが、この時にはゆりにはもう力がほとんど残っていなかった。こんな抵抗に遭ったことはなく、それもゆりの恐怖心を高めた。その恐怖心を『禍々しいもの』は見逃さなかった。激しい閃光が散って、それが飛びだし、ゆりに襲いかかった。

呼びかけ

峯岸牧子は震える手で受話器にしがみついた。パリにいる峯岸宮司に連絡がついたのは夜中の十二時過ぎだった。事情を説明し、指示を仰ぐのが精一杯だった。

「ゆりさんはどういう状態なんだ」

「意識がないの。心臓は動いていて脈も正常なんだけれど、一切の呼びかけに反応しないの。寝ているという状態でもないらしいわ」

「朗はどうしている」

「ずっと側で呼びかけているわ」

「いいか、ゆりさんをあの部屋から出すな。もしかしたら魂が根の道を彷徨っているのかもしれない。出口を絶たれたら二度と帰れなくなる。燭台を灯し続け、ゆりさんが目覚めるまであそこで頑張るんだ」

「わかったわ。『かくし幣殿』と外の連絡は引き続き私がするわ。明日また連絡を頂戴」

「何か変化があったら、こちらの真夜中でもいいから連絡してくれ」

朗は、答えがないことをわかっていてもずっとゆりの名前を呼び続けていた。ゆりが氣絶などではなく、ただならぬ状況にあることは朗にははっきりとわかっていた。朗がゆりに最初に触れたのは百貨店でのルビー事件のときだった。安達春昌と瑠璃媛と全く同じく、二人が触れると乳白色の光とともに静電氣を帯びたプラスチックの下敷きに触れたような帯電感がおこる。あの時に、はじめて現代の二人にも同じ現象が起こることを知ったのだ。理由はわからないが、この感覚は二人の間では既に当たり前になっていた。たとえゆりが熟睡していても朗がそっと触れると必ず同じことが起こった。

この感覚が消えた、たった一度の経験を朗は憶えていた。それは瑠璃媛の最後の生命の火が燃え尽きた時であった。ゆっくりと光と帯電感はなくなり、その後には何もなくなった。いま、ゆりをきつく抱きしめても朗は何も感じなかった。このゆりの体は人体として機能している。だがゆりはそこにいない、そういうことだった。

朗は激しい後悔に襲われながらひたすらゆりの名を呼んだ。もし聞こえたなら、ゆりは自力で戻って来られるはずだ。まだゆりの体の中にいる『禍々しいもの』と対決しなくてはならないが、ゆりの安全の方が大切だった。だが『禍々しいもの』がこれほど大人しいことにも納得がいかなかった。なぜ私を襲わない、なぜゆりをこんな目に遭わせる、朗は未熟な自分を恨めしく思った。

「もうまる二日ですよ」

ケイコの言葉に、牧子はため息をついた。ケイコは声を潜めて続けた。

「このままじゃ、新堂先生までおかしくなっちゃう。食事もとらないし、ずっと寝ていないんでしょう」

「そうなんだけれど、ゆりさんの様子に変化が全くないのよ。動かすわけにもいかないし……本当は新堂先生に仮眠ぐらいはしてもらいたいんだけど……」

「食事も手つかずですか」

「さっき見てきたけれど、水がほんの少し減っていただけだったわ」

「困りましたね」

朗は二日前のように声に出して呼びかけてはいなかった。だが、全

身全霊でゆりによびかけているのは同じだった。目が血走り、体力も限界に来ていることがわかっていたが、少しでも自分が離れたら、その隙に『禍々しいもの』がゆりに何かをするのではないかと思い側を離れる氣にならなかった。外で誰かが言い争うような声が聞こえた。が、牧子がここには誰も寄せ付けないことを知っていたので氣にしなかった。だが、やがて静かに扉が開いて牧子が入ってきた。
「ごめんなさいね。今そういう状況じゃないことは百も承知なんだけれど」
「なにかありましたか」
「あなたとゆりさんのお友だちっていう人たちが、東京から来ていて、どうしても会わせろっていうのよ。今それどころじゃないから出直してくれっていったんだけれど、緊急事態だと聞いたら今度は絶対に帰らないと言い張って」
「東京の友達？　私たちの？」
　ゆりにも朗にも東京に友人はいたが、共通の友人は思いつかなかった。
「名前はいいましたか」
「ええ、高橋さんとおっしゃったわ、男の方は」
　新堂はすぐにそれが高橋一だとわかった。
「ここに連れてきてください」
　牧子は驚いた。
「ここにって、この部屋は……」
「わかっています。だが、私以外に彼女を呼び戻せるとしたら、彼しかいないんです。彼だけで構いませんので、ここに連れてきてください」
　牧子は頷くと出て行った。夫に相談する時間はなかった。たとえ、何かが起こったとしても自分が責めを負えばいいことだと思った。それにこんな緊急事態に、一般人だ、衣装だといってもはじまらない。牧子にとってはいまや神々の怒りのことよりも朗とゆりのことのほうが大事だった。
　高橋一は女性と一緒に本殿に上がってきた。女性の方は遠慮して『かくし幣殿』の外側の廊下に座ったが、高橋一は礼もへったくれもない状態で『かくし幣殿』の中に入っていった。その異様な雰囲氣にただ事でないことが起こっているのがみてとれた。
　燭台の光の中、全身白衣で新堂朗がやはり白衣で横たわるゆりの側に座っていた。目が血走り、ひげが伸びた新堂朗を見るなど高橋一は想像もしていなかった。ゆりは眠っているように見えたが、朗の様子からすると眠っているのではないことは明らかだった。
「新堂さん、いったい何が」
「すまない。ゆりを守ると君と約束したのに、こんな事態に……」
　高橋一の連れてきた女性は、その異様な情景を青ざめた顔で見ていた。一はいたわるように朗の肩に手をかけた。朗は訊いた。
「君はなぜここに？」
「約束通り、婚約者を紹介しにきたんだけど……。聞いたらゆりと新堂さんが大変なことになっているみたいで、無理して入れてもらったんだ」
「来てくれてありがたいよ。ゆりに呼びかけてくれないか。ここに戻って来てもらわないといけないんだが、帰り道がみつからないみたいなんだ」
　牧子は、これは新堂を休ませるいい機会だと思った。

「新堂先生。あなたは何か食べて、少し休んでください」
いままで何度その提案を受けてもきかなかった朗は、今度は素直に立ち上がった。それから『かくし幣殿』の出口まで来ると、高橋一の婚約者をじっと見つめた。
「君は『見える者』らしい」
そのあでやかな身なりの女性は黙って頷いた。
「では、申し訳ないが、なにか高橋くんには見えない物が見えたら、すぐに私に知らせてくれないか」
それから朗は水を少し飲むと、そのまま本殿の外の社務所に向かった。なんとしてでも少し眠って体力を回復しなくてはならなかった。このままではゆりは戻っても『禍々しいもの』を祓うのは不可能だった。牧子はその場を離れて、宮司に経過を説明するために社務所に向かった。高橋一の声は続いていた。婚約者はじっとゆりの様子を見つめていた。何も見えない高橋一には、ここはただの暗い部屋だったが、『見える者』である彼女にはその異様な雰囲氣がはっきりと感じ取れた。ここには何か恐ろしい物がいる。高橋一はゆっくりとゆりに話しかけた。
「ゆり、聞こえるかい。どこにいるんだよ、ゆり」
ゆりはあいかわらず反応しない。とてもきれいな寝顔で横たわっているだけだ。一はだんだん腹が立ってきた。あんなに新堂さんが必死になって呼んでいるのに、こんなに平然と寝ているなんてなんだよ。返事くらいしろよ。
「おい、ゆり、お前どこで何をしているんだよ。あんなに新堂さんに心配かけて、なにやってんだよ！」

Purgatorio

ゆりがいたのは、暗い沼地のようなところだった。どこにも光がなく自分がどこにいるのかわからなかった。足下が泥のようなものにはまり、楽に歩くことができなかった。どこへ行けばいいのかもわからなかった。最初にそこにいることを知った時に、すぐに帰らなくてはと思った。だが、どこに帰ればいいのかわからなかった。帰る所がどこかにあったはずなのに思い出せなかった。暗くて何も見えないその場には、たくさんの人の声が響いていた。
「是諸法空相不生不滅不垢不浄不増不滅是故空中無色無受想行識……」
「ちわきにちわきて　きこしめさむ　くにつかみは　たかやまのするぇ
ひきやまのするぇに　のぼりまして……」
「panem nostrum supersubstantialem da nobis hodie et dimitte nobis debita nostra, sicut et nos dimisimus debitoribus nostris……」
どの声も聞いた事があるが何を言っているのか理解ができなかった。なぜ自分がここにいるのかも理解できなかった。別の声が呼んでいるのも聞こえた。それはゆりの名を繰り返し呼んでいた。その声には聞き覚えがあった。だが、どこでだか思い出せなかった。そのうちに思い当たった。
（いつもの、夢だ……夢の中で会うあの人だ）
それから苦い感情がおこった。母親に叱られる声。氣味が悪いとのしられたこと、姉や弟になじられたこと、父親にはたかれたこと。夢ばかり見ている、夢のことばかり考える自分がおかしいのだと思っ

たこと。そして、現実を見なくてはいけないのだと思った。けれどどこを見ればいい？　何も見えない。
　ゆりはとりあえず自分の足で進んでみようと思った。進めば何か見えてくるかもしれない。ゆりを呼ぶ声はまだ続いていたが、それに応えると母親と父親に叱られると思った。一人で進むしかないと思ったが、進んでも進んでも何も変わらなかった。どれだけ重い足を引きずって歩いても何も変わらなかった。歩いても歩いても何も見つからなかった。なぜ何も見つからないんだろう。なぜ何かを探さなくてはいけないんだろう。何も変わりはしないのに……。
「veniat regnum tuum,fiat voluntas tua,sicut in caelo, et in terra……」
「くさぐさのつみごとは　あまつつみくにつつみ　ここだくのつみいでむ　かくいでば　あまつみやごともちて……」
「無有恐怖遠離一切顛到夢想究竟涅槃……」
　なぜここはこんなに暗いのだろう。なぜ私はどこにも行けないのだろう。ゆりは進む氣もなくなってうずくまった。ここに来る前に自分が何をしていたのか、どうしても思い出せなかった。大切なことがあったはずなのに、それも何もなかったように思えて来た。ここでこうしている方がいいのではないかと思った。夢の続きを見ていればそれでいいのではないかと。けれど、氣がつくと、ゆりを呼んでいた声が聞こえなくなっていた。いつのまにか夢すらもなくなってしまった。寒くて心細かった。自分はひとりぼっちだと思った。
　その時、ものすごく力強い声が響いて来た。
「おい、ゆり、お前どこで何をしているんだよ。あんなに新堂さんに心配かけて、なにやってんだよ！」
　それは、明らかに自分に向けられた声だった。ゆりは伏せていた顔をあげて声を探した。『夢のひと』ではないが、やはりよく知っている声だ。誰だかは思い出せない。それでも必死に声の言ったことを考えた。
　新堂さん？　新堂さん！
　突然記憶がよみがえった。漆黒の髪と真剣な目。意志の強い精悍な横顔。強い思慕がゆりの中に再び生まれた。そして、更に思い出したのは、売り場でのがやがやとした噂。
「新堂さん、退職するんだって」
「どっか遠くに行っちゃうんだって」
　新堂さんが行ってしまう。私を置いて行ってしまう。私が努力もしなかったから、私が好きだということも知らずに、遠くへ行ってしまう。いや、いかないで。ゆりは必死に朗を探しだした。

龍

「いかないで、新堂さん……」
か細い声がゆりの口から漏れた。高橋一は弾かれたように、婚約者を見た。彼女はもう立ち上がって社務所の方に駆け出していた。社務所の入り口で牧子とぶつかりそうになった。
「彼女が！　新堂さんを呼んでます！」
　それを聞くと牧子はすぐに朗を起こしに社務所に戻っていった。三人が『かくし幣殿』に戻ると、ゆりが目を閉じたままわずかに動いているのが見えた。
「……新堂さん、いかないで……一人にしないで」
「ゆり、新堂さんが来たよ！　ここにいるよ！」
一は急いで横に飛び退いて、朗の場所を作った。朗はゆりを抱きかかえて呼んだ。
「ゆり、どこにいる？　私の声が聞こえるか？」
　ゆりの動きが止まった。そして、はっきりと口にした。
「新堂さん……？　どこ？」
「ここだ。手を伸ばせ。声の聞こえる方にだ」
　牧子と高橋一とその婚約者は固唾を飲んで何がおこるのかと見つめた。ゆりはほんの僅かに手を動かした。朗はゆりの手の先の少し離れた所に自分の手を伸ばした。朗がゆりを呼ぶたびに、ゆりの手は少しずつ上にのびていった。ちょうど目の見えないままで前を探りながら歩くようにゆっくりと手が前に伸ばされていく。
「それでいい、もっと伸ばせ。こっちだ」
　高橋一の婚約者は、離れている二人のそれぞれの手のひらから少しずつ乳白色の光のようなものが出てくるのを見た。やがてそれははっきり見えるまでになり、輝きだした。朗はそれを見るとゆっくりと手を近づけてしっかりとゆりの手のひらを握った。同時にその手のひらからはじまって、乳白色の光は二人の全体に広がった。ゆりが帰って来たのがはっきりとわかった。ゆりは目を開けた。
「朗さん……」
　その時、閃光が走って、ゆりの体から黒い影が竜巻のように躍り出た。
「きゃあっ！」
婚約者が素っ頓狂な声を挙げるのと、朗が身構えたのが同時だった。だが、それよりも早く何かが『禍々しいもの』に向かっていった。それは白く光るつむじ風のような物だった。朗にはそれが『神問い』の時にあらわれた『あれ』だとすぐにわかった。それは禍々しい物を包むとそのまま『川のおじいさん』の水晶玉の中に飛び込んで消えた。
「どうしたの摩利ちゃん！」
高橋一はおびえる婚約者に駆け寄った。一には何も見えなかったので、摩利子が叫んだ理由がわからなかったのだ。
　朗はその二人と水晶玉を見てから、更に何もおこらないのを確認して、改めてゆりの顔を覗き込んだ。
「大丈夫か」
「朗さん、ごめんなさい……」
「謝るのは私の方だ。すまなかった。こんな目にあわせて……。どこにいたんだ」

「暗くて、何もない所。お経や、祝詞の声がたくさん聞こえているんだけれど、自分が誰でどこに行けばいいのかもわからなくて……。朗さんの声、ずっと聞こえていたのに、いつもの夢だ、どうせ現実じゃないって……」
「でも、戻ろうとしたんだね」
「誰かが、新堂さんに心配をかけるなって……。それで思い出したの。あなたのこと、あなたが京都に行ってしまうって聞いたあの時のことを。あれは誰だったのかしら。高橋くんみたいな声だったけれど……」
「高橋くんはここにいる。君に呼びかけたのは彼だ」
　ゆりは思ってもいなかった朗の言葉に、閉じていた眸を見開いた。はじめて出口の方に顔を向けたゆりの目が一のそれと合った。一はニコニコと笑ってそこに座っていた。
「高橋くん……。わざわざ、東京から？」
「違うよ。偶然なんだ。来たらこうなっていたんだよ」
「いや、私が呼んだのかもしれない」
朗は小さく言った。ゆりは不思議そうに朗を見た。
「万策尽きていた。どうやっても君を呼び戻せなかった。だれでもいいから君を助けてくれと祈るように願った。そうしたら半日もしないで彼らがここに来ていたんだ」
　彼らという言葉にゆりはじっと高橋一の連れを見つめた。
「あ、紹介するよ。僕の婚約者なんだ。広瀬摩利子さん。約束通り紹介しようと思って」
「はじめまして。昨夜、いきなり京都に行きたいなんていうから、どうしようかと思っちゃった。どんな顔して会おうかと新幹線の中でずっと考えていたのに、必要なかったわね」
　きれいな女性だった。華やかで物怖じせず自信に満ちていた。オレンジ色の艶のある口紅が、黒地の薔薇文様のシルクのブラウスにとてもよく映えていた。氣を見たらとても華やかな黄緑色だった。ゆりは高橋一に微笑みかけた。なんて素敵な人を見つけたんだろう。幸せそうな二人がとても嬉しかった。
　峯岸牧子は辛抱強く待っていた。が、その様子で、ゆりはここがどこであるか思い出した。『かくし幣殿』は旧交を温める場所ではなかった。体を起こしてなんとか自力で起き上がろうとした。拝殿や本殿は横臥禁止だ。ましてやこの神聖な部屋でいつまでも横たわっているわけにはいかない。それに、祓いは終わっていないはずだ。あの『禍々しいもの』はどうなったんだろう。
「朗さん、あれはどうなったの？」
「うん。水晶の中だ」
　ゆりは驚いた。自分が何もしていないのに水晶の中に入るわけはない。誰がそんなことを。
「『神問い』の時の『あれ』が現れて、あの化け物を押さえ込んだまま、水晶に飛び込んだんだ」
　ゆりは水晶を持った。重い。とても片手では持てない。目には見えないが、中に何か居るのが感じられる。そして白い清浄な氣が溢れ出ている。
「なぜ……あれはいったい……」
　ゆりの言葉を聴きながら、朗はじっと考え込んでいたが、やがて一つの結論にたどり着いた。朗は牧子に言った。

「奥出雲の樋水龍王神社の電話番号をご存知ではないですか」
「さあ。でも、支部に聞けばすぐにわかりますわ」
その時、高橋一が立ち上がっていった。
「その神社なら、俺、すぐにわかるよ」
皆が怪訝な顔をして一を見た。
「だって、樋水村は俺のふるさとだもん。伯父さんは総代しているよ。なんなら伯父さんに訊くけど」
「君の故郷だって……」
朗はショックを受けたようだった。だがすぐに氣を取り直していった。
「すぐに伯父さんにかけてくれ。そして神社で何かおかしいことが起こっていないか訊いてくれ」
一は摩利子と一緒に本殿から出て電話をかけた。朗はゆりを助けて『かくし幣殿』から出た。二人で本殿の外まで来た時に一が電話を待機中にしたままこっちにやってきた。
「大騒ぎだって。樋水川が急に水量がなくなって、ご神体の瀧が止まっちゃったらしいよ。なんでわかったのかって」
「やっぱり」
そういうと、朗は牧子の方を向いて話しかけた。
「これから、ゆりと出雲に行きます」
牧子は呆然とした。
「何を言っているの、あなたは二日も寝ていないし、食べてもいないのよ。そんな体で……。ゆりさんだって休まないと」
「それどころじゃないんです」
「朗さん？」
ゆりは、事情が全く飲み込めていなかった。
「樋水の龍王だ」
朗は水晶に触れながら言った。
ゆりは、そういわれてすぐに朗の言っている意味が分かった。ゆりの絶体絶命のピンチに現れて、ゆりを救った白い『なにか』。二人の結婚に対する『神問い』の結果をひっくりかえし、二人を結ばせた超自然的な存在。出雲からの根の道を通って『かくし幣殿』に現れたのは、瑠璃媛の仕えていた樋水の龍王だったのだ。二人にはどうすることもできない『禍々しいもの』を押さえ込み、水晶の中に籠ってしまったので、樋水川が干上がりはじめているのだ。
ゆりは朗に頷いた。牧子も二人の言っている意味が分かったらしい。水晶を一刻も早く樋水龍王神社に持っていき、『禍々しいもの』を祓ってご神体をもどさないと、樋水川は本当に干上がってしまう。つまり流域では大変なことになる。
「でも、その体で今すぐ出雲まで行くのは無理よ」
「時間がないんです。すぐに出発しないと」
摩利子が割って入った。
「私たちレンタカー借りているから、二人を出雲まで届けるわ。着くまで新堂さんは後部座席で寝ていればいいんじゃない？」
高橋一もそれにうなずき、伯父に今から樋水村に向かうと伝えている。ゆりと朗は急いで支度をしに家に戻った。
四人が二十分後に出発すると、牧子は『かくし幣殿』を片付けて、それからパリにいる峯岸宮司に電話をしにいった。ここで、あの恐ろしい祓いを続行しないことになったのはよかったが、二人のことを案

じて落ち着かなかった。いつの間にかあの夫婦が身内のように大切な存在になっていたのだった。

奥出雲

朗は京都市内を出る前には既に深い眠りについていた。ゆりはもたれかかっている朗の頭を楽なポジションに動かした。

「こんなかっこいい神主さんがいるなんて考えたこともなかったわ」

摩利子が助手席から振り向いて、ゆりに笑いかけた。まだ会って一時間もたっていなかったが、ゆりはすっかりこの女性が好きになっていた。

「さっきの無精髭と乱れた服装の時も、ワイルドでよかったけれど、さっぱりして出て来たときには一目惚れするかと思ったわ」

「そんな〜、摩利ちゃん。俺の立場がないよ」

高橋一は、すっかり摩利子の尻に敷かれているようだ。

ゆりは横で眠る朗を再び見つめた。シャワーを浴び、ひげをあたって、新しい斎服に着替えてできた朗は、いつものように隙がなく整っていたが、それでも濃い疲労の色と目の充血は残っていた。二日も不眠不休で私を救おうとしてくれた。胸が突かれる。あの沼のような場所は本当に恐ろしかった。出雲で何が起きるのだろうかという不安もある。が、ゆりの今の心境は幸せとしか形容のできないものであった。ゆりもまだ斎服を着ていた。朗に言われて祓いが終わった後のための着替えと、宿泊の用意をして来た。朗と外泊をするのははじめてだった。こんな状況なのに、そんなことで心躍っている自分を馬鹿みたいだと思った。

「ねえ、ゆりさん。本当にこの人に想われていたのにも関わらず一と婚約していたの？」

摩利子が興味津々で訊いて来た。
「え、ええ」
ゆりはしどろもどろになって答えた。
「高橋くん、みんな話しているの？」
「うん。俺は新堂さんとゆりとのことは、摩利ちゃんに正しくわかってもらいたいんだ。これからも二人とつきあっていくってことを摩利ちゃんに納得してもらわなきゃいけないだろ？」
「私には考えられないわ。こんなに素敵な人に熱烈に愛されるなんてウルトラ羨ましい。さっきゆりさんが目覚める前なんて、ああ、私もこんな人に守られたいって身悶えしちゃった」
「悪かったね。俺は新堂さんみたいじゃなくってさ」
「一は、しっかり前向いて運転しなさい」
ゆりは二人のやり取りにくすくすと笑った。
「嬉しいわ。高橋くんがこんな素敵な人と出逢えたなんて」
「ゆりも、そう思うだろ？　俺も信じられないよ。みんな摩利ちゃんに夢中だったんだ。結婚ＯＫしてくれたなんて夢みたいだよ。でも、俺も嬉しいよ。新堂さんとゆりが幸せで」
「ありがとう」
ゆりは心から言った。もう二度と高橋一に会えないと泣いた夏の日を思い出した。あれから半年。高橋一は「あちらの世界」に属しつつあった。それが朗らかで美しい婚約者を連れて幸せそうに朗とゆりの前に現れてくれた。自分のした心ない仕打ちを全く根に持たず、友達でいてくれた。その一の優しさがとても嬉しかった。
四時間以上のドライブの間、ゆりはほとんど眠らなかった。深く眠る朗の横顔を見ていた。こんな風に朗を見たことはあまりなかった。安心しきってゆりによりかかっている無防備な朗の姿にゆりは心締め付けられた。
「そろそろ出雲ね。よく眠っているのにおこさなくちゃいけないかしら」
摩利子が再び振り向いていった。ゆりは頷いた。そっと朗の頬に手を当てる。壊れやすい宝物に触れるように。
「そのお二人の白い光、いつもなの？」
摩利子が不躾に訊いた。
「ええ、いつもよ。摩利子さん、見えるのね」
「そうなの。あんまり役に立つことないんだけどね」
ゆりは静かに朗の耳に話しかける。もう出雲だと。朗がゆっくりと動き、ゆりの腕をつかみ、その肩に頭を載せた。摩利子はこれからラブシーンでもはじまるのではないかとどきどきしたが、そんなことはなかった。朗は目をしばたたかせると、ゆるやかな動きで体をまっすぐに起こし、それから窓の外を見た。もう高速を降りて、市内に向かっている。樋水村は奥出雲にあるので、あと三十分程はかかる。樋水川沿いに山道を登っていくのだ。樋水川にはほとんど水がなかった。冬なのでもともと水量は少ないが、これほど下流なのに少なすぎる。
しばらくすると摩利子は車窓から外を見て妙なことに氣がついた。四人の乗っているレンタカーが通り過ぎると、わずかではあるが水量が増していくのだ。水は上から下に流れていくのだから、下流から上がっていく車の横から急に水量が増えるのはおかしい。摩利子は新堂朗とゆりの方を振り向いた。二人はゆりの水晶を凝視していた。白い

光がどんどん強くなっている。霧のようなものが流れ出している。摩利子には水晶の中に龍がいると言われても、なんと言っていいかわからなかったので、見なかったことにして目を前方に戻した。とたんに運転している一の様子が目に入った。
「ひっ」
摩利子の声で後部座席の二人も高橋一を見た。一のいつもの清浄な氣がどんどん育っていた。水晶の霧が、その氣と結びつき車から溢れ出していた。小さなMAZDA車が白く光りながら走っていくのだった。
朗は今日まで氣づかなかったことに我ながら呆れていた。面接の時に履歴書を見たが、本籍も住所も樋水とは関係なかったので考えたこともなかった。高橋一を包むこの氣は樋水の氣だったのだ。高橋一は子供の頃から樋水村で川の水をたっぷり浴びて育ったに違いない。それがもとからの性質と結びついて類い稀な氣を育てたのだ。一がゆりにとって特別だったのは当然だ。
「なに、摩利ちゃん？」
高橋一は見えないので、自分の変化にまったく氣がついていなかった。また、前を向いて運転しているので、川の変化ももちろんわかっていなかった。
「何でもないわ。後どのくらい？」
「十分ってとこかなあ。自分で村まで運転するのははじめてだから、適当だけどね」
ゆりはどぎまぎしながら水晶を握りしめた。おかしな感覚だった。ゆりは山陰に来たことがなかった。この道も当然はじめて来るのだ。だが、進めば進むほど懐かしさが心にあふれてくる。どうということのない山道なのに。これは瑠璃媛の記憶なのだろうか。
ふと横の朗を見ると、お世辞にもなつかしいという言葉は当てはまらない緊張した面持ちだった。不快といってもいいほどの表情だった。
「朗さん、大丈夫？」
朗は、頷いた。
「こっちは、招かれざる客だから」
ゆりは朗が樋水龍王神社に対してどんな感情を持っていたのか、今まで知らなかった。そうだった。安達春昌は媛巫女を盗みだして死なせる原因を作ったのだ。結婚する前に『神問い』をするほどに神罰のことにこだわっていたのだから、樋水龍王神社の神域に足を踏み入れることにも大きな躊躇があるに違いない。
「大丈夫よ。『神問い』で私たちを助けてくれたのは、龍王様なんでしょう」
朗は、かすかに微笑んだ。

慟哭

神社の近くで三人を降ろすと、一は駐車場を探して去った。三人はそのまま境内に入っていった。朗は鳥居をくぐる初めの一歩に少し時間をかけて踏み込んだが、何もおこらないのを確認すると、そのまましっかりと進んだ。摩利子は手水の取り方などまともにやったことがなかったので、朗とゆりの作法を見よう見まねで繰り返した。

（一は絶対にこれやらずに来ちゃうわね）

神社では、樋水川の異変がおこって以来、対応に追われて一般の参拝を遠慮してもらっていたが、斎服を着た男女はさすがにただの参拝者に見えず、どう対応するか迷っているようだった。社務所から紫の袴の年配の神職と松葉色の袴をはいている若者がこちらにむかって歩いて来た。ゆりは朗がどう説明するつもりなのかわからなかった。水晶に閉じ込めた龍王をお持ちしました、なんていって信じてくれるだろうか。だがそれは杞憂だった。

「今、この危急の時にこちらにおいでになったということは、何か理由がおありなのでしょうな」

「はい。お許しをいただいて、ご神体の瀧のある池に失礼させていただきたいのです」

「そちらの方のお持ちの水晶、龍王様の氣に満ちておられますな」

「はい。龍王様にお戻りいただかなくてはなりません。詳しい話は、祓いの後でもよろしいでしょうか」

祓いときいて神職の眉が少し上がったが、そのまま二人を案内して境内の奥に連れて行った。その神社は本殿の奥に大きな池があり、その突き当たりには瀧があった。現在はその瀧から水は流れていない。池の水量も極端に減っていた。ゆりは魚が苦しそうに飛び回っているのを見た。

摩利子は緊張して年配の神主と出仕の青年と池の前に立っていた。後ろから高橋一が走って来た。

朗は水枯れしている池の中に入ってゆき、ゆりを瀧の反対側の池の南に立たせた。そして自分は瀧の近く、北側に向かった。ゆりは朗の用意ができるのを注意深く見守った。例の青紫の氣が十分に育った時、朗がこちらを見た。ゆりは水晶を掲げ優しくなでた。

地鳴りのような音がして、空がかき曇り、ゆりの持つ水晶がひとりでに揺れだした。それから目のくらむような光が放たれて、水晶の中から白い龍が飛び出した。

摩利子は生まれてから一度も龍を見た事がなかった。想像の生き物だからいるはずがないと思っていた。だが、いま、水晶から飛び出し、広い空間に浮かび上がった『それ』は、まさに想像画の龍と同じ様相をしていた。蛇のような体に腕と足。角がありトカゲのようなまたは人にも見える顔をしている。白く輝く大きな体を螺旋状にねじり、何か黒いものを抱えていた。そして、ちょうど朗の上でそれを離し、霧のように姿を消した。自由になった黒いものは落ちるように朗に向かっていった。ゆりも摩利子も、またその場にいた誰もが息を飲んだ。何も見えていない高橋一をのぞいて。

新堂朗に黒い『禍々しいもの』が覆いかぶさった。ゆりを二日間閉じ込めた、あの恐ろしいものが。

突然、摩利子には『ヴィジョン』が浮かび上がった。それは時折彼

女におこる不思議な現象だった。誰かが押さえきれない強い感情を持つ時に、摩利子はその人と同調し、その感情が暗闇の中の映画のように彼女の目の前に現れるのだった。

新緑の中、一人の女が立っていた。白い着物、緋の袴、ミントグリーンの着物を頭の上に被せている。口元の紅だけが見えている。その紅の横を一筋の涙が伝う。頭の上の着物が揚げられ切れ長で黒めがちの瞳が向けられる。美しい女だった。その女は次には一緒に馬に乗っている。女が幸せそうに胸に顔を埋める。黒髪が風に舞い、乳白色の光が二人を包んでいる。蝋燭の光の中で横たわるゆりの白い顔が浮かび上がる。離れた所では百貨店の宝石売り場に高橋一とゆりが立っている。一とゆりが幸せそうに笑いあい、一がゆりの首にピンクの勾玉をかけてやる。白い着物の女の胸に矢が刺さり、白い着物にみるみる鮮血がしみていく。女が青い勾玉を差し出して息絶える。乳白色の光がどんどん消えていく。あたりはどんどん暗くなり、横たわる白衣のゆりも、高橋一とピンクの勾玉を嬉しそうに見つめるゆりの姿も消える。暗闇の中から声にならない鋭い悲鳴が切り裂くように響く。肉体の痛みではなく心の、魂の引き裂かれる慟哭の悲鳴。完全な暗黒の中、そのまったく音のしない悲鳴だけが残る。

引き裂くような鋭く甲高い音がして、その暗闇が引き裂かれた。青紫の光が爆発するように広がり、黒い闇は千切られた千代紙のようにバラバラになって池の上に散っていった。同時に雷鳴がして、雨が降りだした。猛烈な雷雨だった。瀧から大量の土砂まじりの水が流れ落ちて、池の水位はみるみる上がっていく。波がおこり、瀧の近くの朗に襲いかかる。

「朗さん！」

岸に戻りかけてたゆりの声が響く。朗は水に潜り、泳ぎながら岸に戻って来た。そして、ゆりと二人で岸に上がって来た。

「いったいどうしたの、摩利ちゃん」

一の声で我に返り、摩利子は泣いていたことに氣がついた。アイメイクが流れるほどの号泣だった。側を通る二人は青ざめてはいたが泣いたりはしていなかった。びしょぬれの肩を寄せて二人で雨の中、社務所の方に歩いていった。

龍の池

「こちらにタオルをご用意させていただきました。落ち着かれましたら、社務所の方で宮司がお待ちしております」

ゆりはニキビ顔の出仕の青年のこまこまとした動きを見て、愛玩犬のようだと思った。どこか懐かしい若者だった。

祓いが無事に終わって、川が元に戻ったので緊張が一度にほどけた。ここが、瑠璃媛のいた神社なのだ。そう思うと不思議な氣持ちになる。池の水を冷たいとは思わなかった。いまは一月の終わりでここは山の中だというのに。だが、こうして湯船に浸かるとほっとする。早く出ないと朗さんが風邪をひいてしまう。

ゆりは摩利子が見たようなものは、何も見ていなかった。だが、暗闇の中からのあの音のない悲鳴は感じていた。いつも強く自信に満ちている朗の中に、ゆりの知らない痛みがある。朗のことはほとんど何も知らなかった。どんな子供時代を過ごしたのか、瑠璃媛のこと以外にどんな前世の記憶を持ち続けているのか、どんな喜びや苦しみを誰と共有して来たのか、ゆりは断片的にしか知らなかった。半年前まで、挨拶程度にしか言葉を交わしたことがなかった二人が一緒になるというのはそういうことなのだ。ゆりは自分が関係した痛みだとは夢にも思わず、朗が見せてくれない心のうちを思い、想い沈んだ。

ゆりが湯浴みから出てくるのを待ちながら、朗は先ほどおこったことについて考えていた。たぶん、龍王と水晶に浄められてあれの力は弱まっていたに違いない。斬るのはそんなに難しくなかった。あの『禍々しいもの』は、たぶん人間の心の中の闇を増幅する魔だったのだろう。ゆりの心のトラウマは子供時代の孤独だった。誰にもわかってもらえなかった、誰にも愛してもらえなかったという思いが心に巣食っている。そして、朗の場合もやはりどうしても昇華できない闇を突かれた。あんな形で痛いところを突かれるとは予想していなかった。あの泣き方からすると、広瀬摩利子はあれを見たのだろう。自分の弱点が曝されるというのはあまり嬉しいものではない。だが、どうしようもなかった。

二人が社務所に行くと、高橋一と、先ほどの年配の神職、そしてニキビ顔の見習い青年が座って話をしていた。二人を見ると一はにっこりと笑って言った。

「こちら宮司の武内センセ。俺が子供の頃、境内で遊ばせてくれたんだ。センセが二人に話があるんだって。俺たちも泊まれって言ってくれたけど、俺と摩利ちゃんは伯父さんの所に泊まるから。明日、迎えに来るよ」

二人は一に礼をいって別れると、待っている武内宮司の前に座った。久しぶりの洋装で妙に身軽な上、宮司の前なのでゆりは変な感じがした。

「まず、お二人には心から御礼を申し上げます。突然の龍王様の不在、一時はどうなることかと思いましたが、お二人のご尽力で大事になる前に解決いたしました。私はこちらで宮司をいたしております武内信二と申します。高橋くんの話によると、京都の笠宮神社にお勤めとか」

「ご挨拶が遅れまして、申し訳ありません。私は禰宜の新堂朗、こちらは妻のゆりです」

朗の言葉にゆりは無言で頭を下げた。朗は続けた。

「私どもが未熟なために、龍王様ならびにこちらに多大なご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます」
「渡欧中の峯岸先生の代理で笠宮さんの憑霊祓いをなさっているとか。お若いのに並ならぬ力のあるご夫婦がいると噂で聞き及んでいました」
「噂？」
「笠宮さんは出雲と縁が深いので、話はよくきくのですよ。大変興味を持ちましてね。今回のことがなくてもお二人を一度お訪ねしたいと思っていました」
　朗とゆりは顔を見合わせた。
「そちらの奥様は、水晶を使われると伺っていますが」
　ゆりは黙って頷いた。
「私どもがお祀りしている媛巫女神のことはご存知でいらっしゃいますよね」
　ゆりは落ち着かない氣持ちになった。ニキビ顔の青年がゆりをじっと見つめている。ゆりは百貨店時代に朗に観察されていた時を思い出して困った。
「はい」
　嘘ではない。朗は何も付け加えなかった。それでゆりもそれ以上のことは何も言わなかった。
「二年後に媛巫女神の千年祭がございましてね。私どもはそれまでにどうしても巫女を見つけ出さねばならないのですよ」
　宮司の言葉の意味がよくわからなかった。
「巫女……ですか？」
　巫女ならいくらでもアルバイトが居るだろう。水晶と何の関係があるのだろう。
「私どもが探しているのは、お札を授与するような方ではありません。媛巫女様の憑り代となる特別な巫女です。アルバイトには務まりません。ここ数年はずっと神職にある方の中で探しておりました」
「では、申し訳ございませんが、私はお役に立てませんわ。私は何の資格もないのです」
　宮司は笑って言った。
「資格がないですって、とんでもない。私のお見受けする所、私がお会いした女性の中であなた以外にこの巫女を務められる女性はいません」
「どういうことですか」
朗が訊いた。宮司は説明した。この樋水龍王神社では百年ごとに媛巫女神のために大祭を行って来た。その大祭では媛巫女神の憑り代となった巫女が龍王の神託を受ける。神託は水晶を使って行い、龍王を水晶に降臨させなくてはならない。
「おわかりでしょうか。先ほどあなたは水晶の中に龍王様を持っておられた。あれをできる女性がそこらへんを歩いているとはお思いにならないでしょう」
「あれは、龍王様がご自分でお入りになったのです。私の力ではありません」
「龍王様は、私がこの神社に足を踏み入れて以来、本日までただの一度もこのお社を離れたことがありませんでした。あなた方は龍王様を呼び寄せるほどの特別なご縁をお持ちのようだ」

朗とゆりは宮司とこの青年が全て知っているのではないかと思った。だが、朗はあえて何も言わなかった。

「そのお話は、千年祭の一度きりのことですか」

「いえ。巫女と申しましたのは正確に言うと『妹神代』という我が社固有の役職でございます。これは媛巫女様の代わりという意味の終身の役職です。実は、この職は『背神代』という神職と対になっておりまして、我が社がお祀りしているもう一柱の神の代わりでございます。夫婦で務める職になっておりまして、代々の『背神代』は宮司を兼任しています。以前は私が務めておりましたが、先代の『妹神代』であった妻が八年前に身罷りましたので、それ以来双方とも空席となっております。ですから、これは奥様だけではなく新堂様にもお受けいただかねばならない話なのです」

朗とゆりは顔を見合わせた。突然そのようなことを言われても困る。

「そのようなお話にこの場ではお返事いたしかねます。しばらくお時間をいただけませんか」

「もちろんです。突然のことですから。しかし、私はいいお返事をいただけると信じていますよ。お二人が今日ここにおいでになったのは、やはりご縁ですからな。龍王様がお連れくださったのだと、喜んでいるのですよ。本殿の裏に小さな離れがございます。今夜はどうぞそこでお休みくださいませ」

「媛巫女神の憑り代だって？　馬鹿馬鹿しい」

二人になった途端、朗が吐き捨てるようにいった。あまりの剣幕にゆりは少し驚いた。

「媛巫女神が憑くわけないだろう。ここにいるんだから」

それは間違いなかった。そもそもゆりは神ではなかった。神でないだけでなく、自分自身に仕えるというのは確かに馬鹿げた話に響いた。朗はこの話が氣に入らないらしい。それならもうここに来ることはないだろう。少し残念だった。

用意された離れはご神体の瀧を臨む広い縁側を持っていた。神域という表現がしっくりくる清浄な空間だった。ゆりはしばらく縁側に出て瀧を眺めていた。朗が疲れていることはよくわかっていたので、寝間着に着替えて早めに床に着いた。朗はすぐに深い眠りについたが、ゆりは眠れずに瀧の音を聞いていた。それから、そっと床を抜け出して縁側から池の側に降りた。

ゆりは自然の水があると、いつも泳ぎたくなる衝動があった。それは子供の頃から見続けた一連の夢の一つに関係があった。夢の中でゆりは泳いでいる。安らかな心持ちで。水が体を包み、癒し、ゆりかごのように落ち着かせる。ずっとそこに居続けたいという、泣きたいような懐かしさにあふれている。やがて、体の近くに何かが寄ってくる。何かはわからないが、『それ』は一緒に泳ぐ。暖かく、冷たい。優しく、つれない。だがそれはゆりの心に必要なすべてを与えてくれ、落ち着かせてくれる。ゆりは『それ』に逢いたくて仕方なかった。目が覚めると、『それ』はどこにもいない。だが、清流、海、深い淵を持つ湖などを泳ぐと、いつもそれに近い感覚が得られた。修学旅行で、社員旅行で、友達との旅行で、そうした清らかな自然の水があると、ゆりはいつも夜中にそっと抜け出して泳ぎにいった。

ゆりは寝間着を脱いで縁側にそっと置いた。冬の池を全裸で泳ぐよ

うなことは今までしたことがなかったが、この特別な池にはもう来ないと思うと、どうしても泳ぎたい衝動を抑えられなかった。そっと足を池に入れる。肌を斬るように冷たかった。だが、そのまま進むと、やがて冷たさは感じなくなった。そのかわり、ほとんど夢と同じといっていい安堵と歓喜が押し寄せて来た。体にまとわりつく水が全てを押し流していく。ゆりはそこに「帰り着いた」と感じていた。どの湖でも海でもない、求めてやまなかったのはこの池だったのだ。氣がつくと、『それ』はそこにいた。ゆりの周りを螺旋を描いてまとわりつきながら一緒に泳いでいた。それは先ほど見た樋水の龍王だった。ずっと側にいてくれたゆりの守り手だった。夢の中で、『川のおじいさん』として、高橋一として。ゆりと朗を結婚させるために、『神問い』の結果を変えに現れ、ゆりが暗闇の中から帰れない時には高橋一として呼びかけに来てくれた。そして、二人を守るために魔を捕まえて、水晶の中に川を枯らしてまで閉じこもってくれた。全てこの龍だったのだ。

ゆりはひとりぼっちではなかった。人生で誰にもわかってもらえないと苦しんだが、本当は常にこの龍が側にいてくれたのだ。どうして氣づかなかったのだろう。

本殿の影から、武内宮司とニキビ顔の出仕の青年が池の様子を見ていた。

「間違いないのか、次郎」

「間違いありません。媛巫女様です。ついにお帰りになったのです」

出仕の青年は袖で涙を拭った。武内宮司は、龍王がゆりと戯れながら泳ぐ様子を頷きながら見ていた。

「お前が、媛巫女様が生まれ変わっている、いずれここにおいでになるといった時には、とても信じられなかったがな」

それから二人はきびすを返して戻っていった。

宮司と次郎が見なかったのは、縁側にうずくまって座っている朗の姿だった。膝の上にあごを載せ、背中を力なく丸めて、ゆりと龍王の様子を凝視していた。朗にも自分の心の動きを正確に形容することができなかった。朗がゆりのためにしたくてもどうしてもできないこと、それができるのは人間である高橋一だと思っていた。相手が人間であり、それが友情と呼べる範囲のことであれば、朗は楽に受け入れることができた。だが、ゆりはそれ以上の存在を見つけた。

それは千年前と全く同じだった。瑠璃媛は樋水の龍王のものであり、龍王に属していた。春昌はただそれを横取りしたちっぽけな盗人に過ぎなかった。ゆりはいま龍王のもとに帰った。声にならない悲鳴はまだ続いている。

龍は動きを止めた。それでゆりは縁側の朗に氣がついた。うずくまってゆりと龍王の方を見ている朗の体からは青紫の炎が静かに燃えている。悲しみや苦悩を漂わせる朗の姿をゆりはほとんど見た事がなかった。ゆりはすぐに朗の元に戻らなくてはならないと思った。龍は水底に消えた。ゆりは岸の近くまで来ると立ち上がった。月光にゆりの濡れた白いからだが浮かび上がる。からだを隠そうと縁側の寝間着に手を伸ばしたが、朗はそれを押しとどめて氷のように冷たくなったゆりをきつく抱きしめた。涙を流さず声も立てずに朗の心が哭いて

いるのをゆりは感じた。
　その夜、朗はいつもよりも性急で強引だった。瀧の音を耳にして池のことを想うゆりを力づくで官能に引き戻す。いつもの優しい愛撫ではなく、襲い、奪い、ねじ伏せる。音のない悲鳴はまだ続いている。ゆりにはそれが朗の慟哭なのか、自分の快楽の叫びなのかわからなくなった。そして、完全に瀧の音がゆりの心から追い出され、龍王の姿は朗の脳裡から消えた。ただ原始的なからだの悦びだけが残った。

母の心

　二人の様子がおかしい。
　出雲から戻ってから朗とゆりはごく普通に見えた。だが、宮司の妻として神職、巫女たち、そして氏子の世話をまめまめしく行ってきた牧子は異変を敏感に感じ取った。朗はいままでと同じように祈祷や作業をこなし、丁寧に掃除をし、総代や氏子の話をきいた。ゆりも牧子と一緒に授与品の袋詰めや、アルバイトの巫女たちの出勤管理や炊事の手伝いなどを熱心に行った。だが二人とも仕事に熱心すぎる。それでいて、時おり心が遠くに泳いでいた。ゆりが朗を見つめる時の目にはいままでにない悲しみが漂い、朗は人前でほとんどゆりの方を見なかった。『かくし幣殿』で見せた狂おしいばかりの二人の思慕が一日で消えたとは思えない。出雲で何かがあったのだと牧子は悟った。
　朗は出雲から帰って来てから、まるで何もなかったかのように振る舞った。千年祭のことも龍王のことも全く口にしなかった。断るとも、行きたくないとも言わず、話題にすらしなかった。優しかったが、ゆりは距離を感じた。帰宅が遅く、あまり話そうとしなかった。触れてもこず、興味すら失ったかのように振る舞った。自分に自信のないゆりは、その朗の変化に傷つくだけで、追うことができなかった。朗を怒らせたのかと苦しんだが、どうしていいかわからなかった。寂しさと哀しさを感じるたびに、ゆりは樋水の龍王の池のことを想った。あそこに逃げ出して泣きたいと思った。けれどゆりにははっきりとわかっていた。泣くことはできてもあの池では自分の心を満たすことはできない。それは朗にしかできないのだ。

朗は自分の中のいらだちと闘っていた。ゆりが樋水に行きたがっているのはわかっている。だが朗は行きたくなかった。ゆりは一言も、ただの一度ですらも樋水に行きたいとは言わなかった。言い出したならば、反対する理由を百でも述べられる、そう思った。だがゆりは言わなかった。もし、朗が明日北海道に引っ越すと言えば黙って着いてくるだろう。だが、ゆりの心は樋水の龍王の池にある。

山の中の寒村だ。あんなところにいたら支部会や神社庁にも忘れられるだろう。そもそも自分の努力と研鑽で階位を昇っていきたいというポリシーに反する。島根には友人もいなければ知り合いもいない。おいしいものが食べられるような所も、ゆっくりと飲みにいくような所もない。媛巫女神だの背神だのという茶番にも腹が立つ。絶対に存在していない神を祀れるか。だいたい、『背神代』なんて媛巫女の添え物じゃないか。殺すために矢で狙ったくせに。

反対する理由を数えあげながら、しかし、朗は一番の理由について考えることを拒否していた。ゆりを二度と樋水に近づけたくない。だが、その馬鹿げた嫉妬に苦しむ自分に我慢がならなかった。ゆりに触れるのもためらわれた。あの夜以来、朗には同じような暴力的な衝動が何度かわき起こった。二度とあんな風にゆりを扱いたくなかった。また、仕事に集中するためにはゆりを視界から追い出すしか方法がなかった。

ゆりはせっせと拝殿の床を拭いていた。完膚なきまでに、ぴかぴかに。床の拭き方も朗に教わったことだった。朗はどんなことも冷静に正しく指示した。ゆりには一度や二度で言われたことができないこともあった。だが朗は二度と同じことを言わなかった。ただ黙ってじっと待った。それでゆりは忘れていたことや、やっていなかったことを思い出した。自分がダメな人間に思えて恥ずかしく思った。ゆりがきちんと仕事をこなすと、朗は優しく笑って「ありがとう」といった。ゆりはそれが嬉しくて、どんなことでも一度でできるようになりたいと努力した。もともとゆりは言われたことを責任を持ってこなす方だったし、朗自身は言われたことを二度繰り返して言われるようなことはまったくないタイプだったので、他の禰宜や峯岸牧子は新堂夫婦の異常なまでのきちんとした習いぶりと仕事ぶりに多いに楽をしていた。

いまのゆりは、そうして習った通りにきちんと床を拭いていた。心と力を込めて、縦と横と両方の方向に。けれど顔は青ざめて、涙をこらえているようだった。一通り拭き終わった拝殿をもう一度拭くために、氷のように冷たい水で雑巾を固く絞っているところを、たまらなくなった牧子が声をかけた。

「ゆりさん、もういいわ。一息ついてお茶にしましょう」

ゆりは牧子になついていた。母親というには少し若い年代だったが、落ち着いていて優しい牧子は、禰宜やアルバイトの巫女、そして氏子たちにも慕われていた。ゆりは実の母親に氣味悪がられて甘えた記憶がなかったので、優しく時には厳しくとても親身になって接してくれる牧子にはじめは戸惑った。だが、いまやゆりにとって牧子は実の母親を大きく超えた存在になっていた。

牧子の入れるお茶は、どうしてこんなにおいしいのだろう。うっすらと甘みがあり、香り高い。最初は何でもない話をしながら、牧子はゆりの青ざめた顔を優しく観察していた。話題が朗のことになった

時、ゆりは下を向いてうなだれた。牧子は優しく穏やかな声で言った。
「立ち入ったことをいってごめんなさいね、ゆりさん。でも、あなたここのところずっと苦しんでいるでしょう。時には吐き出してしまった方がいいのよ」
ゆりはもう我慢ができなくなって、泣き出した。牧子はゆりが落ち着くまでゆっくりと背中をなでてやった。誰にも相談できなかったし、相談するということにも慣れていなかった。朗にはどこにも悪い所がなかったので、どうしていいかわからなかった。けれど、こうやって促してもらったので、ゆりは全てを話した。
牧子は『見える者』ではなかったが、夫との長い結婚生活と憑り代としての経験からその世界のことを感じ知っていた。また、『見えない者』のこともちろんよくわかっていた。そして『見える者』であろうがなかろうが、人の心は同じなのだということも正しく理解していた。『見える者』はスーパーマンではない。そうでないものと同じように、悩み、傷つく。彼らにもできないことがあり、『見える』がためにより多く苦しむこともある。千年前の媛巫女ですら、これほどか弱く、人としての苦しみからも逃れられない。
夫の峯岸裕次に千年前の巫女の話を聞かされた時、そんな途方もない話は到底理解できないと思った。そんな人と同じ敷地で暮らせるのだろうかと不安に思ったものだ。だが、『神問い』の珍事や樋水川の旱魃などが次々と起こったせいで、いまや牧子はすべてを事実として受け入れていた。
ゆりは、夢のことを、安達春昌のことを、ずっと探していた安心できる場所のことを語った。一度も行ったことのない樋水にあった、龍王のご神体の池のことを話した。朗に対する想いのことを、どうしてもふさわしい妻になれない自分の至らなさのことを吐露した。千年祭と武内宮司の申し出のことを伝えた。そして朗がそれを快く思っておらず、断るだろうと思っているのに行きたくて残念に思っている自分のことを話した。そのことを朗には言っていないのに、出雲から戻ってから避けられていると感じていることも。
「ねえ、ゆりさん」
牧子は穏やかに口を開いた。
「あなたはとてもすてきよ。新堂先生にふさわしくないとか、そんな風に自分をおとしめる必要はないのよ。新堂先生がどれほどあなたに夢中か、自分でも知っているでしょう？」
ゆりにはそんなふうには思えなかった。
「それに新堂先生をそんなに畏敬してもいけないわ。あの人はたしかに立派だけれど、それでも神様ではないのよ。そんなに遠い存在にしてしまったら、あなたの期待の高さに息苦しいだろうし、あなたに弱さが見せられなくてつらくなると思うわ」
ゆりは泣くのを止めたくて、涙を拭った。
「あの人もまた、悩んでいるんだと思うわ。あなたをとても大切に思っているからこそ、どうしていいのかわからないんだと思う。男はね。女と違って、愛のためにすべてを投げ出したりしないわ。でも、それは愛を軽んじているわけではないのよ。ただ、女とは違うの。それだけなのよ」
ゆりは牧子をじっと見つめた。牧子はゆりの手を優しく叩いて言った。

「新堂先生は、自分からたくさん話すのは苦手だから、あなたの方からきっかけをつくってあげなさい。愛していると言ってほしいのなら、黙って待っているのではなく、自分の方から氣持ちを伝えなさい。なにも言葉にしなくてもいいの。面と向かって言うのが難しいなら、年中行事やイベントにかこつけてメッセージを送りなさい。送り続けていれば、どんな照れ屋でもほっておけなくなるから」

ゆりは素直に頷いた。牧子は微笑んだ。

「たいていの男は複雑でひねくれ者よ。自分ではそう思っていないけれどね。女はそれをわかって受け止めてあげなくちゃね」

聖ヴァレンタインの夜

トントンと心地よい音を立てて、包丁がチョコレートを刻んでゆく。温めた生クリームにクーベルチュールを少しずつ混ぜていく。このケーキを作るのは久しぶりだった。以前作った時には、甘いミルクチョコレートだったが、今日はできるだけ甘さを押さえた大人の味にしたかった。

朗はほとんど甘いものを食べない。チョコレートケーキなど好きではないのかもしれない。でも、このケーキはゆりの自信作だった。生地がしっとりとしていて、温かいうちもおいしいし、冷めると表面のチョコレートがぱりっと固まり、別のおいしさがあるのだ。

ゆりは朗とヴァレンタインデーを一緒に過ごしたことはなかった。朗にチョコレートを贈ったこともなかった。去年のこの日は高橋一にイタリアンをごちそうした。デザートにチョコレートは出てきたが、ゆりはチョコレートをプレゼントはしなかった。百貨店の二月の食品売り場はヴァレンタイン一色になる。社員販売のお知らせもまわって来た。一が喜ぶと知っていても、愛の告白の代わりにチョコレートを贈ることはどうしてもできなかった。

ゆりはどうして高橋一を男として愛せないのだろうとずっと思い悩んでいた。今ならば、自分の氣持ちがはっきりわかっている。ゆりはずっと朗に贈りたかったのだ。

朗の氣持ちの重荷にならないよう、ゆりはケーキをたくさん焼いた。社務所の全員にといって出せば、たとえ朗が食べなくても構わないのだ。住まわせてもらっている家にはオーブンがなかったので、社

務所の厨房にあるものを貸してもらった。しばらくするといい香りがしてくる。ゆりはここしばらくなかった浮き浮きした氣持ちでデコレーション用のチョコレートを溶かし始めた。

「ひゃ〜、おいしそうだ」
最初に手を伸ばしたのは甘いものに目のない佐竹禰宜だった。「あ、センセ、だめですよ。これはバレンタインのケーキだもの。最初は新堂先生が食べないと〜」
巫女のアルバイトのケイコが鋭く突っ込む。
「いいな、お前、こんな嫁さんがいてさ」
佐竹禰宜が朗に勧めると朗はごく自然にケーキに手を出した。それからゆりの方をみて笑顔を見せた。
「ありがとう」
太陽のように温かい笑顔だったので、ゆりは泣きそうになった。「よっしゃ、これでもういいだろう。俺も食うぞ」
佐竹がかぶりついたのをはじめにみんなが楽しく食べだした。
「わ。すごい。これ中がしっとり!」
「ゆりさん、レシピを教えてください〜」
アルバイトの巫女たちがキャッキャと喜んで食べている。氣がつくと、朗がさりげなく二切れ目を取っていた。もっともハイエナ軍団がほとんど食べてしまったので二切れ目で打ち止めだったが。牧子はゆりに優しく微笑んだ。
空になった大皿とお茶の道具を下げて、社務所で洗っていると、そっと朗が寄って来て、皿ふきを手伝ってくれた。
「ありがとう。君がケーキづくりも上手だなんて知らなかったな」
「朗さん、甘いものは苦手なんだと思っていたから」
「甘みが上手に抑えられていた。いままで食べた中で最高だった」
ゆりはヴァレンタインデーのキャンペーンをはじめてくれたどこかの会社に感謝した。
「今日は、夕食の用意しなくていいよ」
「どこかにおでかけ?」
「いや、ケーキのお礼だ。二人でどこかに食べにいこう。記念の最初のヴァレンタインデーだ」
ゆりは再び泣きそうになった。
「黙って待っているのではなく、自分の方からメッセージを送りなさい」
牧子の温かい助言は、こんなふうに二人を助けた。朗はゆりのシグナルを見逃さなかった。夕刻に境内から出て行く少しおしゃれをした二人を見て、牧子は満足そうに微笑んだ。
ゆりは朗とデートらしいデートをしたことがなかった。たった一度、翡翠の勾玉を見に二人で横浜までドライブしたことがある。あのときは、往きには二人とも片思いをしていると思っていたので、デートらしいデートとは言えなかった。すぐに朗は京都に引っ越してしまい、一ヶ月後にはゆりが朗のもとに嫁いで来たので、デートをする恋人としての期間がなかったのだ。
宝飾品売り場の先輩の吉田恭子によると、新堂朗はデートの設定でもそつがないということだった。こんな場所にこんなおしゃれなレストランがいつの間にできたんだろうというような店に連れていく。そ

して、その店はたいてい数カ月後には雑誌などで紹介されて予約が取れなくなり、雑誌を手にしたがやがやした客で台無しになってしまうらしい。そうなると朗はその店にはもう行かず、その代わりにまたしてもどこからか感じのいい店をみつけてくるのだそうだ。

「ワインのこととか、メニューのこともよく知っているんだけど、ひけらかすような感じが全くないんですって。総務の山中さんがこれまでで最高の『完璧なデート』だって絶賛してた。ああ、私も一度でいいからごちそうしてもらいたい。でも、最近、プレイボーイは返上しちゃったみたいだからね」

吉田恭子はちらりとゆりを見ていった。だが当のゆりは感じのいいレストランに一度も連れて行ってもらったことはなかった。

「今夜はフレンチやイタリアンはどこもいっぱいだからね。半分和風でもいいかい」

「もちろんよ。どこかお目当てがあるの？」

「友達が連れていってくれた店があるんだ。少し歩くけど」

「そんなに寒くないもの。散歩を楽しみましょう」

ずいぶん長い間、こんなふうにリラックスして話をしていなかったような氣がする。何を怖れていたんだろう。ゆりは不思議に思った。

朗もほっとしていた。日にちが経つにつれぎくしゃくした関係は固定化していってしまいそうだった。自分がはじめたことなのに、どうやって元に戻していいか、途方に暮れていた。朗は樋水から帰って半月近く考えていた。樋水のこと、龍王のこと、それから自分のこれからのこと。考えに考え抜いた上で、ようやく結論を出した所だった。数日前から、ゆりの様子が少しずつ明るくなったことも氣づいていた。だから、いずれにしても数日以内にちゃんと話をしようと思っていた。だが、話をしようとするとどう切り出していいかわからない。困っていたのだ。

その店は、清水寺の近くの小路を少し奥まで入ったところにあった。このあたりは住宅が多く、小さな看板は氣をつけていないと見逃してしまう。観光客はめったにこない穴場だった。カウンターが六席とテーブルが二つ。友人と来た時にはカウンターだったが、今回はテーブルを頼んだ。外から見ると普通の京風の家屋なのに、中はシックな半洋風。黒を基調にしたモダンなインテリアに、どっしりとした桜の樹のテーブルがしっくりと合っている。料理も和洋折衷だった。

朗は最初によく冷えた白ワインを洋風の肴と一緒に出してもらい、それから料理を魚を中心にした和風のもので見繕って軽い日本酒に変えた。注文がとてもスマートだったのでゆりは感心した。これが有名な『完璧なデート』なんだわ、と思った。

「どうした？」

「ううん。朗さんとデートするのはじめてだな、と思って」

朗は優しく笑っだ。

「そうだな。五年間、もったいないことをした。だが、これからも時間はたくさんある。ときどきこうして出かけよう」

ゆりは嬉しそうに微笑んだ。ほぼ毎日和服を着ているので、朗にはゆりのワンピース姿が新鮮に映り、ゆりは朗のワイシャツ姿にドキドキした。二人はキャンドルの光に照らされてデートらしいデートを楽しんだ。

アイスクリームの皿が下げられて、ゆりがコーヒーをかき回してい

るとき、朗は不意に言った。
「樋水に行こう」
あまりにも思いがけない言葉だったので、ゆりはもう少しでコーヒーカップを倒す所だった。
「千年祭の話を受けよう」
朗は真剣な表情で繰り返した。
「でも、どうして……。朗さん、嫌なんでしょう？　私知っているわ。わたし、朗さんが嫌なら……」
朗はそれ以上言わせなかった。
「どっちにしても一年後にはどこかほかの神社に就職活動をしなくてはいけないんだ。私たち二人を必要としてくれる所がすでにあるなら、渡りに船と乗った方がいい。あそこでなら君は安心して暮らせる。君の幸せな顔が見たい」
ゆりは目を潤ませて首を振った。
「わたしはどこにいてもあなたといられれば幸せよ。あなたがそう言ってくれるだけでどんなに幸せか」
「じゃあ、もっと幸せになるように。一緒に樋水に行こう」
朗は運命の舵が大きく切り替わるのを感じた。自分の人生はこの女とともにあると腹を括った。神社庁も自分の手で獲得する階位も憑霊払いも二の次になるかもしれない。それでも完全に道が絶たれるわけではないだろう。ゆりと深い縁を持つ龍王に仕えることになるのも不安はあったが、それでもゆりを幸福にしたかった。そして、ゆりの信頼を失いたくなかった。ぎくしゃくしているのはこの二週間で十分だった。
ゆりは牧子のアドバイスを思い出していた。
「男は、愛のためにすべてを投げ出したりしないわ。でも、それは愛を軽んじているわけではないのよ。女はそれをわかって受け止めてあげなくちゃね」
ゆりは、それにも関わらず、朗が自分の幸せを一番に結論を出してくれたことを決して忘れまいと思った。たとえ、この後、彼にとって仕事が第一義で自分が二の次になったとしても、それを恨んだりはすまいと心に誓った。彼の重荷にならないよう、一生懸命支えていこう。そう思った。
「樋水に行ったら、こういうしゃれた店とは縁がなくなるな。ここにいるうちにたまには出かけよう」
「向こうでもできるだけおいしいものが食べられるように一生懸命料理するわよ」
「新しい住まいにオーブンがあるといいな。あのケーキはまた食べたいから」
ゆりは笑った。毎年、必ず焼こう。クリスマスにも、誕生日にも、彼が楽しみにする好物をたくさん見つけていこう。
店を出ると雪が降りだした。それは柔らかく力なく溶けやすい泡雪だった。冬の終わりが近づいている。季節はめまぐるしく動いていた。明日は再び神社での忙しい仕事が二人を待っている。笠宮神社までの少し遠い帰り道、二人は幸福に酔いながら京都の冬を楽しんだ。

（初出　二〇一一年三月　書き下ろし）